

2013年3月21日

私立大学図書館協会  
国際図書館協力委員会  
委員長 長島 敏樹 様

関西学院大学三田キャンパスメディア館 瀬戸口 雅士  
聖マリアンナ医科大学医学情報センター 南 泰樹  
同志社大学図書館 中島 操  
明治大学中央図書館 曾野 正士  
立正大学情報メディアセンター 太田 優未  
(大学50音順、5大学5名)

### 2012年度 海外集合研修報告

2012年12月3日（月）より12月9日（日）まで、2012年度海外集合研修に参加いたしましたので、別紙のとおりご報告いたします。

## 2012年度 私立大学図書館協会海外集合研修報告書

### I. 研修概要

#### 1. 研修テーマ：「東アジアにおける電子化推進図書館を見る」

東アジアにおいて、特に韓国と台湾では、大学図書館等における電子化の推進が著しい。そのような図書館で実際に電子化の状況を視察し、併せて施設や設備を見学し現地職員と意見交換することで、電子化に関する見聞を深めるとともに、先進的な図書館の組織・運営方法の事例に触れ、最新の取り組み等の情報を得る。また、図書館職員相互の国際的な人的交流を実現する。

#### 2. 訪問機関

##### ① 国立デジタル図書館

図書館 URL <http://www.nl.go.kr/nl/index.jsp>

##### ② 韓国教育学術情報院 (KERIS)

機関 URL <http://www.keris.or.kr/>

##### ③ 国立ソウル大学中央図書館、同医学図書館

大学 URL <http://www.snu.ac.kr/>

図書館 URL <http://library.snu.ac.kr/eng/index.ax>

医学図書館 URL <http://library.snu.ac.kr/eng/index.jsp>

##### ④ 私立延世大学図書館

大学 URL <http://www.yonsei.ac.kr/>

図書館 URL <http://www.yonsei.ac.kr/eng/campus/libraries/>

##### ⑤ 私立梨花女子大学図書館

大学 URL <http://www.ewha.ac.kr/>

図書館 URL <http://lib.ewha.ac.kr/>

##### ⑥ 国立高雄第一科技大學図書館

大学 URL <http://www.nkfust.edu.tw/bin/home.php>

図書館 URL <http://www.lic.nkfust.edu.tw/bin/home.php>

※ 当初は国立台湾大学図書館を訪問する予定であったが、天候不良により、飛行機の到着時間が大幅に遅れたため、訪問することができなかった。

#### 3. 研修日程

期 間：2012年12月3日（月）～2012年12月9日（日）

1日目：12月3日（月） 羽田空港から金浦空港（渡韓）

2日目：12月4日（火） 10:00～12:00 韓国教育学術情報院 (KERIS)

14:00～16:30 国立デジタル図書館

3日目：12月5日（水） 10:00～12:00 国立ソウル大学医学図書館

14:00～16:00 国立ソウル大学中央図書館

4日目：12月6日（木） 10:00～12:00 私立延世大学図書館

14:00～16:00 私立梨花女子大学図書館

5日目：12月7日（金） 仁川国際空港から桃園国際空港（台北）へ（渡台）

6日目：12月8日（土） 14:00～16:00 国立高雄第一科技大學図書館

7日目：12月9日（日） 松山空港から羽田空港（帰国）

## II. 事前準備

### 1. 事前説明会の開催

11月12日(月)慶應義塾大学湘南藤沢メディアセンターにおいて、事務局から報告事項、研修委託先の株式会社アメリカンドリームより、研修日程や訪問先との折衝状況の詳細説明を受けた。また、団長等の役割分担を行った。

### 2. 各機関の事前調査、事前質問票の作成・送付

事前調査については、参加者を2グループに分け、担当機関を決めて調査を行い、参加者全員が情報を共有した。

事前質問票は、事前説明会の前後を通じて、参加者全員で作成し、事務局を通じて各機関に事前送付した。訪問機関の負担を考慮し、敢えて細かな質問の羅列を止め、我々が関心を持っている大まかな項目(以下)とした。

対象：国立デジタル図書館

- ① デジタル化による苦勞した点、メリットとデメリット
- ② 利用者にとってのデジタル化のメリットとデメリット、利用方法
- ③ 仮想空間と物理的なサービス空間を構成した意図
- ④ 仮想空間と物理的なサービス空間を連携するサービス
- ⑤ アナログとデジタル混在の時代における理想の(または目標とする)図書館像
- ⑥ 人的資源管理(職員教育システム)
- ⑦ 国内におけるデジタル化の浸透度

対象：韓国教育学術情報院(KERIS)

- ① 「国家知識ポータル」とKERIS・大学図書館・公共図書館の役割
- ② デジタル化の方向性と進め方、普及状況と現場の声、メリットとデメリット、今後のコンテンツの展開、蓄積・提供方法
- ③ 国内の代表的な図書館システムの構成
- ④ アナログとデジタル混在の時代における理想の大学図書館像
- ⑤ 大学図書館職員を対象とした人的資源管理

対象：各大学図書館

- ① デジタル化を導入した契機とその後の経過
- ② 学生と教員にとってのデジタル化のメリットとデメリット
- ③ 学習支援および研究支援とその評価システム
- ④ アナログとデジタル混在の時代における理想の(または目標とする)大学図書館像
- ⑤ 人的資源管理(職員教育システム)

なお、事前質問に対する回答については、研修中の図書館案内や担当職員の方々との意見交換、質疑応答の際にお話を伺い、次項以降の研修報告内に含めて記述することとした。

### Ⅲ. 研修報告

#### 目次

1. 訪問機関概要（韓国）	
1.1. 韓国教育情報化推進政策	p. 5
1.2. 韓国教育学術情報院（KERIS）	p. 8
1.3. 国立デジタル図書館	p. 11
1.4. 国立ソウル大学中央図書館	p. 17
1.5. 国立ソウル大学医学図書館	p. 25
1.6. 私立延世大学図書館	p. 30
1.7. 私立梨花女子大学中央図書館	p. 38
2. 訪問機関概要（台湾）	
2.1. 台湾情報化事情	p. 45
2.2. 国立高雄第一科技大學図書館	p. 47
3. まとめ	
3.1. 最後に	p. 53
3.2. 謝辞	p. 54

## 1. 訪問機関概要（韓国）

### 1.1. 韓国教育情報化推進政策

#### <韓国教育情報化と韓国教育学術情報院・大学等>

世界中の国々は、自国の発展を通じて国際競争力を強化することを使命とし、様々な取り組みを必要としている。その中で、韓国は急速に発展する情報技術を政策的に取り込み、国民育成のために、様々な教育情報化政策を進めている。

韓国の教育情報化政策は、「教育情報化 3 段階総合発展方案（基盤助成期（1996-2000）、拡散及び定着期（2001-2005）、高度化期（2006-2010））」で進められ、現在は「教育科学技術情報化基本計画（2010-2014）とスマート教育推進戦略（2011-2015）」をさらに進めている。これらの政策は、場所の隔絶や経済的な事情等、いくつもの困難な障壁を解消し、国民全体に教育を普及させるための土台の役割を担っている。

この政策を通じて「情報」を教育の単純な「ツール」から教育の「本質的要素」として捉えられるようになり、教育活動を新しいパラダイムへ進め、学習空間の拡張、時間の拡張、利便性の拡張等、多様な政策に展開されている。

韓国教育学術情報院（KERIS： Korea Education and Research Information Service）は、これらの政策の中心的役割を担い、大学等の学術機関は KERIS の政策と提供するサービスを活用し、各学術機関独自のサービスを創意工夫し展開している。

#### <学術情報の流通>

学術資料は、大学や他研究機関等の多くの機関に散在し、資料の性質や提供形態も一様ではないため、様々な流通経路を辿り利用者に提供される。一例として、KERIS は大学図書館の学術情報を中心に大学図書館総合リスト（Union Catalog）、学術研究情報サービス（RISS）等の各種サービスを提供し、国立中央図書館のデジタル図書館ポータルは所蔵資料をデジタル化した原文データベース、収集したオンライン資料を提供する。他機関についてもそれぞれに特化した学術資料やサービスを提供している。

一方で、韓国情報化振興院（NIA）では、更に広い学術資料やサービスを対象に、教育・研究活動を総体的に支援し、学術情報及び利用価値の高い知識情報資源を国家レベルで流通させるために、KERIS の「教育学術メタデータベース」、科学技術情報研究院（KISTI）の「科学技術メタデータベース」や民間のポータルサイト等、多くの機関が生成する学術資料のメタデータ等を一元的に蓄積した「国家知識ポータル」を提供している。

#### <司書育成>

韓国政府は、行政・政策を積極的にかつ短期間に集中して整備する一環で、図書館関連法も整備し、国家発展の知識情報化に直結する施策として、図書館を情報整備基盤の中核に位置付けることとした。その中でも特筆すべきは、司書の位置付けと育成である。

1963 年の「図書館法」制定により司書資格が規定され、1987 年の改正により、司書職のグレード化（等級化）が行われた。それまでの正司書、准司書の区分が 1 級正司書、2 級正司書、准司書に区分され、1 級正司書では図書館情報学の博士学位や実務経験が必須条件となり、上級正司書資格を取得するには、大学院等での専門分野の上位学位が必要である。

2006 年現在、32 の 4 年制大学に図書館情報学科を設置、それ以外の養成機関として、2 年制専門大学に文献情報科、教育大学院修士課程、1 年制の司書教育院があり、年間約 2,000

人の1級正司書、2級正司書、准司書を輩出している（金 2007: 744）。司書資格取得後もKERIS、国立中央図書館等の専門的機関での研修により、常に専門性の向上を図っている。

司書は一定規模以上の全ての図書館（公共図書館、大学図書館等）の専門職として必置とされるだけでなく、デジタル化が進行している情報分野の専門家としても、企業・研究機関等に情報専門職として活躍する場を見出している。

今回訪問したKERIS、国立デジタル図書館、各大学図書館の専門的職員も、全員司書資格を有していた。司書の育成に関しては、日本の大学図書館職員（司書）との相違が大きい。特に、大学図書館職員の専門性の在り方について、教育研究の視点から多々検討する必要がある。

### <電子リソースの契約形態>

KERISが行うデータベース契約には、コンソーシアム方式とナショナルライセンス方式がある。

コンソーシアム方式は、複数の図書館が共同して購入・利用契約を出版元やデータベース業者と結んで運用するもので、現在130程度のデータベースをコンソーシアムで購入している。日本のJUSTICE契約に相応する。

ナショナルライセンス方式はKERISが予算措置、並びに大学へのライセンスの確保を行い、全ての大学研究者に提供している。また、17時から21時までは全国民が利用可能である。現在では、ACM、PML、LexisNexis Academic、CiNii等非常に高価で有用なデータベースも含め22種類のデータベースを契約している。日本に相応する契約形態はない。

なお、電子ジャーナル契約については、韓国科学技術情報研究院（KESLI）が共同購入を行っている。

### <学術資料の分担収集>

外国学術雑誌については、各機関が全ての外国学術雑誌を収集することは難しいため、ソウル大学、延世大学といった国から指定された9大学に国から補助金を与えて、主題別に収集している（FRIC: Foreign Research Information Center）。このサービスにおいては、全て無料で研究者に提供されている。

### 引用（参考）文献

- 1) 東アジア図書館調査委員会, 2006, 「第3章 国の情報化政策との連動について」『東アジア図書館実態調査に関する調査報告』41-49.  
([http://www.mext.go.jp/a\\_menu/shougai/tosho/houkoku/06120702/005.pdf](http://www.mext.go.jp/a_menu/shougai/tosho/houkoku/06120702/005.pdf), 2013.2.6.)
- 2) 韓国教育学術情報院, 2011, 『2011 教育情報化白書: Adapting Education to the Information Age (要約本)』  
([http://www.keris.or.kr/english/whitepaper/WhitePaper\\_japan\\_2011\\_wpap.pdf](http://www.keris.or.kr/english/whitepaper/WhitePaper_japan_2011_wpap.pdf), 2013.2.6.)
- 3) 金容媛, 2000, 「CA1296 - 韓国教育学術情報院の新設」『Current Awareness Portal』(245) (<http://current.ndl.go.jp/ca1296>, 2013.2.6.)
- 4) 金容媛, 2006, 「韓国における知識情報資源管理の政策と現状」『文化情報学』13(1): 15-31.  
(<http://www.surugadai.ac.jp/sogo/media/bulletin/Bunjo13-01/Bunjo13-01kim.pdf>,

2013.2.6.)

- 5) 金容媛, 2007, 「韓国における図書館情報専門職制度の最新の状況」『図書館雑誌』  
101(11) : 744-5.

## 1.2. 韓国教育学術情報院 (KERIS)

### <情報化政策と KERIS>

韓国政府は行政改革の一環としての組織の統廃合を行い、1999年にKERISを新設した。KERISは教育の情報化と関連した政策の執行機能を持ち、大学における学術情報と初・中等の教育情報の中枢機関としての韓国教育情報化の中心的な役割を担う。その設立は、従来分散されていた教育情報と学術研究情報の収集と流通を一元的に統合することを目的としている。また、教育行政、生涯教育、進路・職業教育、民間教育等の情報化や、教育格差の解消、教育に情報技術の活用を広めるための国際交流、情報技術の進展に伴う迅速な提供の強化等、韓国教育情報化の中心的な役割を担っている。

KERISの主な活動としては、教育学術情報化の基盤として、大学図書館総合リスト(Union Catalog)サービス、デジタル学術情報流通体系(dCollection)システム、eラーニングコンテンツ(KOCW: Korea Open Course Ware)、学術研究情報サービス(RISS: Research Information Service System)、相互貸借(ILL: Inter Library Loan)サービス、教育情報総合サービス(EDUNET)システムの提供・運営・管理等がある。

### <大学図書館総合リスト (Union Catalog) サービス>

韓国で提供されているUnion Catalogは、共同目録分担方式を採用し、蓄積した目録及び所在情報をRISSサービスに利用する仕組みとして構築されている。日本のNACSIS-CATと基本的な発想は同じシステムである。2011年9月現在、参加館は672館、924万件の書誌データ、4,464万件の所蔵データを有する。

### <デジタル学術情報流通体系 (dCollection) >

dCollectionは、機関で生産される全ての知的生産物を収集・管理するための基盤システムとして、2003年にKERISが開発した。大学図書館で収集した学術情報をKERISの管理するdCollection統合システムに蓄積し、RISS統合検索サービス(RISS4U.NET)より、学術情報の原文をオンライン提供するサービスである。日本のJAIROと類似した発想のシステムである。段階的にライセンス管理、ホスティング管理、研究業績情報等のシステム強化が行われている。

### <eラーニングコンテンツ>

KERISでは、大学で公開された講義及び講義資料の共同活用サービスとして、KOCW(Korea Open Course Ware)を構築・運営している。公開された講義資料は、国家標準規格のKEM(Korea Educational Metadata)でデータを作成し、利便性の向上を図るためクリエイティブコモンズライセンス管理を導入している。サービス提供方式は、大学サイトに直接連携する方式と、大学から提供を受けた講義コンテンツを提供するストリーミング方式の2方式で提供している。

現在では、130箇所の大学で開講されている約4,000科目が受講可能である。ノーベル賞受賞者の授業や、有名な教授の授業を収録している。2010年よりiPhoneやiPad等の携帯デバイスからでも利用できるようになっている。視聴するための身分制限は無く、大学に通えない人々でもインターネットの環境が整っていれば、講義を視聴できる仕組みを構築している。全国民が利用でき、生涯学習という側面からみても非常に有用な取り組みである。

### <学術研究情報サービス (RISS : Research Information Service System) >

RISS は、大学が生産・保有・購読する全ての学術資料を共同で利用するためのシステムである。Union Catalog がその共同目録情報にあたる。他機関も利用することができるように自機関の学位論文等の研究成果物や購入した電子ジャーナル等の学術資料のメタデータを RISS に提供したり、自機関の図書館システムからの統合検索対象に RISS を指定したりすることができる。

Dcube (e-Distribution system) は、利用者が RISS サービスを介して、資料検索・文献複写申し込みを行うと、利用者が受取希望館に設定した図書館に文献複写が送付されるサービスである。複写物は電子ファイル (PDF) で送付され、利用者には印刷して渡される。以前は日本のように郵送でやり取りしていたが、電子ファイルでのやり取りになったことで、申し込みから 1 日以内に送付できるようになった。

### <教育情報総合サービス・システム (EDUNET) >

EDUNET は、全国教育情報共有体制の下で、多様な教育コンテンツに標準化したメタデータを付与して、共有・流通させるサービスである。開かれた教育社会、生涯学習社会を実現する目的で、学生 (幼児から大学等)、教師、父母、専門職等を対象に、先端情報技術メディアを利用した教授・学習方法の活性化のため多様な教育情報サービスを実施している。



図 1 KERIS 外観



図 2 質疑応答後、記念撮影

### <質疑応答で>

著者、図書館、出版社等の多くの人々が電子資料を作成し、利用者がその電子資料を活用する。電子資料の作成から利用までの流れの中では、出版社はともかくとして、著者、図書館、利用者の多くは、情報技術のエキスパートではない。紙が電子になったところで、何の問題もないように思う人もいるかもしれないが、紙資料と同様に電子資料についても、その特性に応じて、作成、蓄積、組織化、提供等の各段階に応じて留意すべき事項がある。

そこで、事前質問ではないが「情報技術の進展に応じて、電子資料が新たな規格等への対応をどのように行っていくのか。」という趣旨の質問を試みた。担当者からは「以前、文字コードについてユニコードへの変換作業を行ったことがある。」との返答をいただいた。さらに、「外字、異体字等の対応については、今後の対応をどのように考えているのか。」と質問してみた。しかし、「外字」や「異体字」といった文言が通訳を介して相手方に通じていないのか、角度を変えて質問しても、担当者からは「ユニコードについては永続的に対応できると思っている。」との返答があり、こちらの意図が通じない噛み合いが悪いやり取りのままとなってしまった。

外字・異体字等について利用可能な統一フォーマットが存在しない状況は韓国でも同じだ  
と思う。やり取りの中に「フルテキストについては、PDF を基盤に作っている」との説明  
があったことを勘案すると、少なくとも PDF における埋め込みフォントの問題はあるよう  
に感じた。

#### 参考文献

- 1) 韓国教育学术情報院, 2011, 『2011 教育情報化白書 : Adapting Education to the  
Information Age (要約本)』  
([http://www.keris.or.kr/english/whitepaper/WhitePaper\\_japan\\_2011\\_wpap.pdf](http://www.keris.or.kr/english/whitepaper/WhitePaper_japan_2011_wpap.pdf),  
2013.2.6.)
- 2) 金容媛, 2000, 「CA1296 - 韓国教育学术情報院の新設」『Current Awareness Portal』  
(245) (<http://current.ndl.go.jp/ca1296>, 2013.2.6.)
- 3) 金泰樹, 2007, 「Institutional Repository in Korea: KERIS dCollection)」『琉球大学学  
術リポジトリ』琉球大学学術リポジトリ事務局  
(<http://ir.lib.u-ryukyu.ac.jp/handle/123456789/155>, 2013.2.6.)

### 1.3. 国立デジタル図書館

#### <国立デジタル図書館建設の背景>

韓国文化観光部は、図書館情報政策の一環として、「図書館情報化推進総合計画」（2000年）に21世紀の図書館像を示し、情報格差解消のための国策事業として、公共図書館及び学校図書館へのデジタル環境づくりを促進してきたが、2004年に国立中央図書館(National Library of Korea)に対して、図書館情報政策の権限を移管した。

国立中央図書館は、「国立中央図書館2010」（2005年）で示したビジョンのスローガンである「知力国家」実現のための情報基盤として、21世紀の図書館像を備えたデジタル情報総合センターの機能を持つ「国立デジタル図書館」を2009年5月に国立中央図書館の敷地内に開館した。

国立デジタル図書館は、国家知識ポータルをはじめとするインターネット上のサービスだけでなく、多用なデジタル資料を収集・整理・保存し、かつ、その情報を用いたサービスを研究・開発・提供するための拠点として、「国家情報リテラシーセンター機能」「国家情報レファレンスセンター機能」「国家情報政策サービスセンターとしての役割」を担う。

#### <図書館概要>

国立デジタル図書館は、「Dibrary」（Digital + Library）と称され、ディブラリーポータルという仮想空間と情報広場という物理的空間を統合し、デジタルとアナログを融合したサービスを提供している。

開館日は、毎週火曜日～日曜日で、開館時間は9:00～18:00である。蔵書数は、2013年1月現在、893万冊（韓国内出版物612万冊、国外出版物111万冊、非図書資料142万件、古典27万点）、デジタル資料は、205万点所蔵している。1日の来館者数はデジタル図書館が平均約800人、中央図書館で約1,600人、合計約2,400人である。

建物は、地上3階（事務スペース）、地下5階となっている。地下1階は、デジタルブックカフェ（休憩スペース）があり、国立中央図書館と「知識の道（The Way to Knowledge）」と名付けられた通路で連結されている。この通路は、アナログ世界からデジタル世界への変遷をデジタル映像で表現している。地下2・3階部分は主に利用者向けスペース、地下4・5階は自動化書庫を設置している。



図1 館内予約用PCとキオスク端末



図2 デジタル資料閲覧スペース

## <施設・設備>

### ①概要

図書館の利用者は、入館の際の本人認証後、発行された利用証を用いて入退館でき、館内に設置されている予約用 PC またはキオスク端末 (図 1) から席や部屋の予約・確保、資料の利用ができる。入館ゲートを通る前の地下 3 階ロビーは、開かれた広場として、デジタル資料の閲覧できるスペース (図 2) があり、センサーを通じて利用者を認識して反応する、デジタル図書館を象徴した造形物 Digital Monument (知識の庭) (図 3) が広がっている。このスペースは、Global Lounge (多言語情報室) として、英語、日本語、中国語、フランス語、ベトナム語の OS 利用が可能な PC が設置されており、外国人を含めた全ての利用者が利用できるように多言語サービスを提供している。PC 以外の設備として、韓国内の新聞や雑誌を閲覧できる Digital Newspaper (大型タッチスクリーンキオスク) (図 4) や、インテリボードと呼ばれる国立中央図書館所蔵の貴重書や古書をデジタルブック形式で閲覧できるスクリーン (図 5) も設置している。また、入館ゲート前も含め館内には、デジタルサイネージ (図 6) が至るところに設置されており、館内マップや開館時間等、館内施設やサービスについての案内を確認することができる。

特に Digital Newspaper については見学時にも多くの利用者が閲覧しており、常日頃から多くの利用者に一般的に利用されていることが伺える。



図 3 Digital Monument (知識の庭)



図 4 Digital Newspaper



図 5 インテリボード



図 6 デジタルサイネージ

地下 2 階の入館ゲートをくぐると、個人利用空間としてデータベースやオンラインコンテンツの検索・閲覧・印刷のできるデジタル閲覧室（図 7）、図書館所蔵資料のマルチメディアを利用できるメディア資料利用室（図 8）、映像・イメージコンテンツを編集できるデジタル編集室がある。当日の座席の予約は館内の予約用 PC またはキオスク端末から、当日以外はホームページから可能で、予約をして連続 3 回以上未使用の場合は 3 日間利用停止といった罰則が課せられている。またグループ利用空間には、セミナー室や複合上映館がある。これらの当日の座席・部屋利用は館内の予約用 PC から、当日以外はホームページから行うことができる。こちらも予約後に未使用時間が 30 分経過すると予約が自動的に取り消され、1 週間利用停止の罰則となる。



図 7 デジタル閲覧室



図 8 メディア資料利用室

施設・設備の中でも特徴的なのは、映像・音響を専門家レベルの機器類を使って撮影・録音・編集し、コンテンツ制作のできる映像・音響・UCC（User Created Contents）スタジオ（図 9）、映像・イメージコンテンツを編集する専門の映像編集プログラム搭載の PC が設置されているデジタル編集室等、マルチメディアコンテンツの撮影・編集・制作、そしてその展示といった一連の流れが全て館内で行えるように施設・設備が整備されていることである。また、シアター形式の小会議室（図 10）、複数人のグループで所蔵資料のマルチメディアコンテンツを鑑賞できる Multiplex（複合上映館）（図 11）がある。小会議室では、利用者主催のセミナーや上映会等も開かれ、広く利用されている様子であった。



図 9 映像・音響・UCC（User Created Contents）スタジオ



図 10 小会議室



図 11 Multiplex

## <利用者支援サービス>

### ①利用者教育

韓国では国による政策から今やデジタル化は必須である。国立デジタル図書館がこの中心を担うのは、国民に物理的な空間やサービスを提供するため、様々なメディアを利用・活用できる施設を提供することはもちろんのこと、その利用・活用するための教育サービスに力を入れて取り組むためである。

国立デジタル図書館では様々な機器を使って、利用者教育を行っている。現在、韓国では、PC やスマートフォン等が普及しているが、そういった機器類を持っていない階層のためにも、デジタル図書館では、無償で機器類を使った利用教育を受けることができるようになっている。利用者を対象としたプログラムとして、見学プログラムと教育プログラムが用意されている。見学プログラムでは団体を対象とし、デジタル図書館に関する詳細な案内やサービスの運営体制を紹介している。教育プログラムでは、利用者を対象とし、デジタル知識・情報の効果的な活用方法（著作権や個人情報保護に関すること）の案内や、図書館の資料や施設を紹介する利用者教育が行われている。中でも、デジタル図書館特有と言うべきプログラムとして、電子ブックの制作方法を教えるプログラムを無料で開催している。

また、Accessibility Help Center（ヘルプセンター）では、障がい者や高齢者がデジタル情報へアクセスし、活用するためのデジタル機器類を取り揃えており、全国民を対象とした支援が行われていることが伺える。

### ②オンライン提供コンテンツ

国立デジタル図書館では、予算の範囲内で貴重図書、稀覯本から適宜対象資料を選定し、電子化してディブラリーポータルに登録し、国家知識ポータルにもメタデータを提供している。

このディブラリーポータルでは、国立中央図書館が所蔵している原文のデジタル化資料（約 39 万冊）とオンライン資料（約 79 万冊）を含んだ 1 億件以上の統合検索をすることができる。また、著作権が消滅している資料に関しては、自宅からでもオンラインで閲覧できるようになっており、著作権が残っている資料でも、デジタル図書館もしくは家から近い公共図書館、大学図書館で閲覧できる座席（PC）が用意されているため、わざわざデジタル図書館まで足を運ばなくても閲覧できるようになっている。

この他にも、Web サービスとして、情報検索に関する問い合わせ等は、主題別に担当司書がおり、質問に応じて、調べ方、研究の方向性、参考資料等を紹介してくれるサービスが

ある。

### <司書研修及び専門的業務>

国立デジタル図書館は、物理的な利用者サービス空間である情報広場とデジタル仮想空間であるディブライリーポータルを提供している。これらの空間・サービスを統合的に運営し、デジタルとアナログを融合するサービスを提供するため、司書は様々な業務を担当している。

たとえば、オンラインで情報検索環境をより一層向上するためには、図書（紙資料）とオンライン資料の統合した検索環境を必要とするが、その要となる MDS（標準データフォーマット）での整理（メタデータ作成業務）を司書の業務としている。

この他の業務としては、利用者支援サービスとして、調査支援、講習会やプログラム等の計画・立案・実施等も司書が行っている。

これら多様なサービスを国民に充実して展開するために、全ての司書が教育（研修）を受けることを義務化している。

### <オンライン資料納本制度と、購入、提供、保存>

電子ブックを主とする電子資料については、購入しなければならない状況にあり、法整備が進み、近い将来、納本制度が実施されることとなっている。納本制度は、出版社等の圧迫に繋がらないようなバランスを取った利用者への提供と、国による資料の保存が主たる目的である。利用者への提供については運用が未定であり、公共図書館等でのみ提供可能とする等の限定的な運用となるであろう。永続的保存については、PDF、EPUB3 等ファイル形式は規格化されているが、長い期間で見たときに、上位規格へ移行、可読機器の対応の問題、保存媒体の劣化の問題等、永続的保存については、検討すべき今後の課題である。

### <司書との懇談>

国立デジタル図書館では、司書の方と 1 時間程度、こちらで用意していた質問事項を中心に意見交換を行うことができた。その内容については、ほとんど上述しているのだが、印象に残っていることとしては、電子資料の保存に関する話だ。電子化が進む一方で、電子資料の保存という側面では、保存形式のことや、可読機器の対応の問題等、日本でも課題として議論されている。「韓国では電子化を推進する上で、こういった問題をどのように考え、図書館として保存と利用ということでは、どちらに比重を置いているか」という質問をしたところ、「図書館として 7 対 3 ぐらいで保存のことを重視して考えてはいるものの、電子資料に関しては永続的な保存ができるのかどうかという点は不安に感じている」ということを話しておられた。やはり抱えている課題は、日本同様ではあるが、そういった不安を抱えながらも、利用者のニーズに応え、国をあげて、電子資料の提供を推し進めている韓国と、様々な課題があるため、なかなか電子化を進めることができない日本と、どちらが正しいのか今の段階では答えが出せないが、問題意識を持ちながらも、時代・ニーズに対応している姿勢というのは、見習わなければいけない点ではないだろうかと考えさせられた。

また、韓国で電子化が推進され、発展している理由として、「韓国人の国民性が、トレンドや流行りに敏感なことが大きい。」ということをお話されたのに驚いた。

### 参考文献

- 1) 藤井眞樹, 2011, 『韓国国立中央図書館見学について:国立情報学研究所(スライド資料)』

- (<http://www.nii.ac.jp/CAT-ILL/event/2011/pdf/NLK.pdf>, 2013.2.6.)
- 2) National Digital Library of Korea, (2012), 『dibrary : 自然、人間、情報が織り成す国立中央図書館 (パンフレット)』.  
([http://foreign.dibrary.net/aboutDibrary.do?lang=ja\\_JA](http://foreign.dibrary.net/aboutDibrary.do?lang=ja_JA), 2013.2.6.)
- 3) 武田和也, 2007, 「CA1641 - 全世界のデジタル図書館の統合ポータルを目指して - 韓国国立デジタル図書館の概要 -」『Current Awareness Portal』 (294)  
(<http://current.ndl.go.jp/ca1641>, 2013.2.6.)
- 4) 図書館におけるデジタルコンテンツ利活用検討委員会, 2011, 『図書館デジタルコンテンツ流通促進プロジェクト (報告書)』  
(<http://www.unisys.co.jp/unicity/pdf/soumu-project2.pdf>, 2013.2.6.)

## 1.4. 国立ソウル大学中央図書館

### <大学概要>

国立ソウル大学 (Seoul National University) は 1946 年に韓国初の国立大学として設置された。

大学は、冠岳キャンパス・蓮建キャンパスに分けられ、大学本部のある冠岳キャンパス (Gwanak Campus ソウル特別市冠岳区新林洞) はソウル南部冠岳山の麓に位置しており、医学部のある蓮建キャンパス (Yongon Campus ソウル特別市鍾路区蓮建洞) はソウルの中心部、かつての旧京城帝国大学医学部跡で、大学路と昌慶宮路の間に位置している。

学部は、法学、医学、工学、人文、自然科学、農業生命科学、経営、師範、薬学、社会科学、生活科学、獣医科学、歯科、看護、美術、音楽の 16 学部、大学院は一般大学院 84 専攻、専門大学院は、保健、環境、行政、国際、歯医学、経営、法学の 7 系列が設置されている。なお、歯科学は 2002 年の学部募集を最後に歯医学専門大学院 (Dental School) に統合、法学も 2009 年以降の学部募集を停止し、法学専門大学院 (Law School) に統合されている。ただし、医学については、専門大学院 (Medical School) ではなく、医学部・医学研究科で教育・研究が行われている。

学生は学部・大学院を併せて約 28,000 名が学び、教員約 5,600 名、一般職員約 1,000 名が働いている。

### <図書館概要>

冠岳キャンパスには、本館として中央図書館、分館として社会科学図書館、経営学図書館、国際学図書館、農学図書館、法学図書館の計 6 館が設置、蓮建キャンパスには、医学図書館、歯医学図書館の 2 館が設置されている。

ソウル大学中央図書館 (図 1) は、1975 年 1 月に蓮建キャンパスからの移転により建築され、37 年経過している。開館時間は、平日は 9:00~21:00、土曜日は 9:00~17:00、日曜日は 13:00~17:00、学習室は 6:00~23:00 (1 室は 24 時間開館) である。座席数は約 3,500 席で、内 500 席が 24 時間利用可能である。蔵書数は、2011 年 4 月 1 日現在、図書 4,445,092 冊、雑誌・新聞 95,953 タイトル (うち、学術誌 約 10,000 タイトル)、電子ジャーナル 33,000 タイトル、非図書資料 215,316 点である。1 日に約 1 万人の利用がある。



図 1 ソウル大学中央図書館

中央図書館のフロア構成として、1・2 階に閲覧室、3 階が閲覧室・製本室・ロッカー・軽食コーナー、4 階にエントランス (図 2)・貸出返却カウンター (図 3)・雑誌・二次資料・情報検索室・レファレンス・相互貸借コーナー・研究支援室・事務室・会議室等、5 階に 1946 年以降の資料・指定図書室・閲覧室、6 階に 1945 年以前の古文書資料室 (旧京城帝国大学図書館蔵書約 40 万冊含む)、学位論文・視聴覚資料・各種コレクション・新聞閲覧室等が設置されている。

4 階エントランス付近には、座席予約キオスク端末、デジタル新聞閲覧用大型スクリーン端末、金色の寄付者銘板 (図 12) が設置されていた。



図2 中央図書館エントランス



図3 貸出返却カウンター

### <導入システム概要>

ソウル大学図書館は、INEC 社と図書館基本システム SOLARS7 (SeOul Library Automation Research System) を共同開発している。このシステムを国内の大学に対して提供可能にすることで、国内での図書館システムの先導的な役割を担っている。電子資料については、ExLibris 社の MetaLib、SFX を提供ツールとして導入し、利便性を向上している。

デジタル資料は、多様化と共に提供することが当然のように考えられている中、ソウル大学中央図書館は、紙媒体資料についても歴史的価値があると共に今後も流通する形態と考えており、継続的な提供が必要であるとの見解であった。また、デジタルネイティブ世代ともいえる学生を前提として、ユーザビリティに配慮し、コンテンツの特性に配慮した画面遷移と設計を行い、図書館が様々な資料を保存・蓄積・提供する役割を熟慮した上でのユーザビリティに富んだシステム構築を行っており、Proxy サーバを経由したリモートアクセスも可能としている。

### <施設・設備>

#### ①概要

4 階の入館ゲートをくぐると貸出返却カウンターやブックカフェと呼ばれるフロアがあり、デジタル新聞を閲覧できる大型スクリーン端末 (図 4) の設置、教員から寄贈された教員著書の展示 (図 5) が行われており、ボール状のイスやベンチ席等の閲覧・休憩スペースとなっていた。日本でこういったスペースがある場合、話し声等が目立つ場所となることが多いように思うが、特に騒がしくなることもなく、利用している学生は個人で各々の閲覧・休憩を取っていた。



図4 デジタル新聞閲覧用  
大型スクリーン端末

また同フロアには、キオスク端末(図 6)から座席予約をして入室する情報検索室があり、PCが120台設置されていた。2万人以上いる学生数に対しては少ないということであった。加えて、U-Space(図 7)と呼ばれる、有線・無線LANが整備されているノートパソコン専用デスクのある部屋も設置されていた。



図 5 教員著書の展示



図 6 座席予約キオスク端末

その他、図書・雑誌資料が配架されている閲覧スペースには、データベースを除いて約8万タイトルの雑誌資料と閲覧席、約450万冊の図書が収蔵されている書架スペース(図 8)がある。図書書架スペースは主に保管をメインとし、閲覧席はなく書架のみのフロアであった。今後建設予定の新館では、好きなスペースで図書を読むことのできる閲覧室を計画中的のことであった。



図 7 U-Space



図 8 図書書架スペース

他には、マイクロフィルムやAV資料を閲覧できるスペース(図 9)、新聞の縮刷版コーナーがあった。デジタル新聞としては、朝鮮日報と東亜日報の2紙が利用できる。

普段は施錠されており、教授以上の許可を得た者しか入ることのできない古文書資料室(図 10)も案内いただいた。ソウル大学の前身である京城帝国大学時代に所蔵していた資料の約8割にあたる40万冊の資料を収蔵している書庫である。第二次世界大戦以前の日本の史料も数多く収蔵されていた。洋書については、政策でドイツ語資料を多く収集していたという。これらのうち1%のみデジタル化されており、うち400冊が国宝級とのことであった。

また、2007年より主題別専門司書のリエゾンライブラリアンによる学習・研究支援を行う研究支援室(図 11)が相互貸借コーナーに隣接して設置されている。



図9 AV資料閲覧スペース



図10 古文書資料室

## ②アクティブ・ラーニング

案内して下さった司書 Cho Jinyoung 女史の話によると、図書館側が学習スペースを提供することで、学生側が自主的に学習するため、あまり意見や苦情が挙がることはない、とのことであった。ソウル大学の学生の質やレベルが感じられる発言であった。なお、現在ソウル大学ではラーニング・コモンズのようなスペースは見られないが、600億ウォン（約50億円）の寄付によって2014年に新館を開館予定（2013年1月より建設開始）で、新館には、インフォメーション・コモンズと、現在は館内飲食不可のためカフェを併設予定ということであった。

### <利用者支援サービス>

#### ①利用者教育

利用者への広報の手段として、図書館ホームページ、facebook、E-mail、掲示物、大学が発行する学園新聞等にて、図書館の広報活動を行っている。電子ジャーナル等についてのお知らせはE-mailが特に効果があるとのことであった。

利用者教育としては、資料検索方法、図書館利用案内、学外資料取寄方法等を教えている。また、主題別データベース利用方法やEndnote活用法、留学生を対象に外国人の講師を招いて特別講義も行っている。利用者教育担当職員は8名、2012年1月～10月の期間でオリエンテーションを含めて190回開催し、3,650人の参加があったという。オリエンテーションや各種講習会の内容は図書館のホームページ上のDB Instructionにアップされ、学内者のみ閲覧が可能、配布資料も印刷が可能となっている。

また、インターネット上で利用者の質問を受け付け、それらの質問に対してリエゾンライブラリアンがライブチャット機能等を利用して回答するDotori Onと呼ばれる独自のサービスを平日の9:00～18:00の時間帯で行っている。

#### ②オンライン提供コンテンツ

TutorialsVODというページには、EndnoteやScienceDirect等のデータベースチュートリアルビデオがアップされており、学外からも自分の好きなときや使い方がわからないときに閲覧が可能となっている。講習会についても撮影した動画をホームページにアップし、参加できなかった学生が後で視聴できるようにしている。

利用者からの要望として、PCの性能の向上や、Windowsだけでなく、Mac用の講習会の実施等が要望として挙げられているとのことであった。

### ③データベース・電子ジャーナルの利用頻度

学生はデジタル環境に慣れているため、デジタルコンテンツの構築は当然の状況であるという。電子ジャーナルもよく利用されており、ScienceDirect 利用率は世界の 10 位以内に入っている。このような結果からもわかるように、学生も積極的にデータベースや電子ジャーナル等の電子リソースを利用している。

#### <主題別専門司書と人材育成>

ソウル大学中央図書館では、2007 年に設置された研究支援室 (Library Liaison & Research Support) (図 11) に 8 名の学科担当専任司書 (リエゾンライブラリアン) を配置し、司書 2 名が 2~3 学部を受け持っている。現在は、教授 3,650 人に対して、修士・博士以上の講義を対象に支援を行っている。ただし、主題別専門司書としてではなく、司書として採用されてから、主題別専門知識の取得を行っている。



図 11 研究支援室 (Library Liaison & Research Support)

中央図書館においては、基礎教育における教育支援と、専門教育・研究における研究支援を実施している。その技術を身につけるために、全職員を対象に書き方教育 (ライティング)、専門家による特別講演、学科支援、投稿、能力強化に必要なことについてセミナーや年 2 回程度のワークショップを開催し能力を開発したり、国家試験や国立各機関主催の講座等の受講も積極的に行っている。

日本の大学図書館と比べ、あらかじめ、教育研究支援活動に必要とされる能力 (コンピテンズ) が明確化されており、学内において図書館が担うべき目標が共有化されている印象を受けた。

#### <寄付の文化と背景>

米国の大学においては寄付担当部署があるほど、大学にとって重要な取り組み (事業) であるが、韓国においても、企業・財界人・卒業生等からの寄付が多く、大学における取り組みも日本と比べ意識が高いといえる。

ソウル大学中央図書館入口ロビーには、金色の寄付者銘板 (図 12) が多数掲示されていた。担当者の話では、このたび KEF (Kwanjeong Educational Foundation) の理事長 Chong-Hwan Lee 氏より 600 億ウォンの寄付があり、この寄付金を基に 2013 年 1 月から新図書館建築が着工となり、2014 年 5 月に隣の敷地に竣工予定とのことであった。新図書館ができれば施設面でも近隣の大学に劣らない最新の設備になるとのことであった。



図 12 寄付者銘板

寄付行為に対する税制優遇もあるが、名誉を重んじる韓国社会の風土と、著名大学への寄

付行為における社会的影響も韓国ならではといえる。特に、サムソン電子グループの大学への施設・設備の寄付が多く見られ、今回訪問する各大学施設の大半は、企業等からの寄付により設置されたものであった。

しかしながら、寄付を受けるには、それなりの背景があると思われる。ソウル大学では起業家輩出・起業支援プログラムにより、起業教育としてはソウル大学経営専門大学院（JEMBA）が経営者の資質と実務能力を備えた起業経営者育成のための実務を中心とした教育プログラムを実施している。また、財団法人ソウル大学産学協力財団が知的財産権管理、技術移転、創業支援を実施し、OB等をメンターとして活用する等、社会と積極的に関わっている（経済産業省関東経済産業局 2012: 124）。このような取り組みも、社会からの寄付をもたらす土壌の一つとなっているのではないだろうか。

## <デジタル資料とアナログ資料の取り扱い>

### ①デジタル化作業

電子媒体や学術情報サービスへの要求に応えるため、2002年から電子図書館構築事業を立ち上げ、デジタル化作業を開始し、2012年12月現在、約49万件のデジタルコンテンツを構築している。

デジタル化を行うに先立って、制作的な側面として、対象範囲、選定指針、著作権、知的財産権等について、技術的側面として、サービスの質、表現の標準化、メタデータのフォーマット、著作権・知的財産権の保護、様々な技術的措置について検討しておくことが必要との説明があった。

メタデータについては、利用者サービス用ファイルと図書館保存用ファイルに分けて作成し、利用者サービス用は画質よりも伝送速度を優先し、図書館保存用は画質を優先している。コンテンツの選定は学内著作物を対象としており、消滅のおそれのある資料、破損のおそれのある資料、歴史性や価値のある資料、学内刊行物、著作権解決資料を優先している。これまでに構築したデジタルコンテンツは、公文資料、学位論文、学術ビデオ、記録資料、医学資料、学内刊行物、写真資料等がある。

ソウル大学では、利用環境と基盤施設が電子化に対応しており、中央図書館におけるデジタルコンテンツ構築は当たり前のことであり、あらゆる資料の電子化は、大学・教職員・学生・図書館にとって無駄なことであるとの説明があった。印刷物が持つ歴史的価値も重要であり、全てが電子化されるべきものでもない。その意味で、様々な情報媒体で保存・提供していくことが、図書館としての役割を果たすことになり、ソウル大学中央図書館としての使命と認識していた。



図 13 勤労奨学生等による書架整理

### ②アナログ資料の整理保存

見学させていただいた5階の開架書庫には全蔵書450万冊のうち110万冊が配架されており、勤労奨学生やボランティア（兵役免除者）30～40人が毎日書庫整理（図13）を行っている。書庫から直接本を取り出して読める空間にすることが目標とのことで、40年前に

設計された図書館の収容冊数は150万冊であり、現在は約3倍の450万冊と収容冊数を大きく上回り本が入りきらない状況とのことであった。

ソウル大学中央図書館は、電子化を促進する一方、学術コンテンツが冊子として存在する意義を理解し、デジタル資料とアナログ資料それぞれの保存・活用への取り組みが顕著であり、国の最高学府の長としての誇りが感じられた。

Cho Jinyoung 女史の「2年後是非もう一度お越しく下さい」とのお誘いに、2014年竣工となる新館での新たな施設、専門的なサービスに期待が大きく膨らんだ。

### <研修雑感>

訪問当日は例年にない大雪となり、貴重な降雪のキャンパスを訪問することとなった。足元に気を付けて中央図書館4階エントランスから入館、会議室にひとまず手荷物を置き、約30分間、館内を案内していただいた。説明の中に、延世大学を意識した発言があり、韓国を代表する2大学の関係が感じられた。その後、会議室で、1時間弱図書館課長、企画広報課課長補佐、課員（司書）等々の方々と意見交換を行った。

ソウル大学（中央図書館）は、事前質問票に沿った内容で丁寧に率直なコメントをいただいたが、延世大学では、事前質問票の内容が幅広いのでどのように説明するか分からないこともあって、その場で改めて具体的な質問を提示することとなり、事前質問票の作成の難しさを痛感した。

今回の質問事項の中に、電子化及び図書館システムに関する事項があったが、各大学ともシステム担当者が同席されなかったこともあるが、電子リソース利用に係わる機能である「VPN (Virtual Private Network)」、「Proxy サーバ」、「Shibboleth 認証 (シングルサインオンシステム)」といった言葉自体の理解がソウル大学に限らず困難であったことも意外であり印象的であった。職員数が多く、その中での役割分担が明確に区分され、専門性が高められていることが伺われた。その中でも、ソウル大学は、私立の延世大学と比べ、3～4年で図書館（本館、分館）内での異動があるため、専門性の確保の仕方に違いが見られ、それぞれの大学独自の仕組みが根底に存在していることが理解できた。

### 注

#### 1) 韓国の大学類型

韓国では、4年制総合大学のことを大学校 (University)、4年制単科大学及び総合大学の各学部のことを大学 (College)、2～3年制の大学を専門大学 (Junior College) と区分しているが、専門大学も大学 (College または University) と称することができる。

### 引用（参考）文献

- 1) 経済産業省関東経済産業局, (2012), 『参考資料 海外大学における企業家輩出・企業支援環境』, 99-130 ([http://www.kanto.meti.go.jp/seisaku/gizyutsu/internship/data/18FYreport\\_reference.pdf](http://www.kanto.meti.go.jp/seisaku/gizyutsu/internship/data/18FYreport_reference.pdf), 2013.2.6.)
- 2) 野上香織, 2008, 「韓国の大学図書館における利用者サービス実態調査」『平成19年度国際交流推進機構基盤強化経費に基づく教職員等の海外派遣事業実施報告書 (京都大学)』 ([http://repository.kulib.kyoto-u.ac.jp/dspace/bitstream/2433/50580/3/oversea\\_korea200802.pdf](http://repository.kulib.kyoto-u.ac.jp/dspace/bitstream/2433/50580/3/oversea_korea200802.pdf), 2013.2.6.)

- 3) Seoul National University Library, (2012), 『SEOUL NATIONAL UNIVERSITY LIBRARY GUIDE』.
- 4) Seoul National University Library, (2013), 『SEOUL NATIONAL UNIVERSITY LIBRARY HP』 (<http://library.snu.ac.kr/eng/index.ax>, 2013.2.6.)
- 5) Seoul National University Library, (2013), 『Friends of the SNU Library』 ([http://friends.snu.ac.kr/eng/sub2\\_4.php?ptype=view&idx=5500](http://friends.snu.ac.kr/eng/sub2_4.php?ptype=view&idx=5500), 2013.2.6.)
- 6) 図書館におけるデジタルコンテンツ利活用検討委員会, 2011, 『図書館デジタルコンテンツ流通促進プロジェクト (報告書)』 (<http://www.unisys.co.jp/unicity/pdf/soumu-project2.pdf>, 2013.2.6.)

## 1.5. 国立ソウル大学医学図書館

### <図書館概要>

1946年に医学部本館2階に開設、その後、1971年にCMB財団(CMB Foundation of America)からの資金援助により医学図書館が設立、1993年に2階建てから現在の3階建てに改修された(図1)。職員は館長(Director)1名、管理職(Deputy Director)1名、司書(Librarian)6名の8名、組織としてテクニカルサービス部門(Division of Technical Services)、ライブラリサービス部門(Division of Library Services)、アドミニストレイティブサービス部門(Division of Administrative Services)で編成されている。



図1 ソウル大学医学図書館(右の建物)



図2 1階エントランス付近

テクニカルサービス部門の業務編成には、研究サポート(Research Support)サービスの一つとして、中央図書館でも実施されている Library Liaison & Research Support 業務も含まれている。ただし、医学図書館の組織構成は、中央図書館の構成規模を縮小した感じであるとの説明があった。

1階はエントランス(図2)、入退館ゲート(図3)、事務室、単行本室、2階は学術雑誌室、KOREA MEDLARS CENTER 事務室、3階は閲覧室、学生学習室、情報検索室、地下1階は閉架書庫が配置されている。1階から地下1階へは螺旋階段(図4)が設置されている。学習室は予約制で736席設置され、学年別に学習する空間が設けられ、1年間を通して利用可能である。

蔵書冊数は、2012年1月末現在、図書212,904冊(国内48,202冊、外国163,858冊、電子ブック844点)、学術雑誌5,629誌(冊子657誌、電子ジャーナル4,972誌)、データベース32点、非図書資料778点である。



図3 1階入退館ゲート



図4 地下1階への螺旋階段

## <施設・設備>

### ①概要

まず入退館ゲート前で気になった機器類は、無人返却機（図5）である。バーコードリーダー付きの無人返却機で、日本に見られる図書館の外に置かれている一般的な返却ポストとは異なり、返却と同時に即時システム処理が行われる。そして、入退館や資料の貸出には、学生証（図6）、図書館のホームページからダウンロードできるモバイルパス（スマートフォン・携帯電話）（図7）、バーコードのいずれかで行うことができるようになっている。これらは、中央図書館も同様のシステムである。



図5 無人返却機



図6 学生証リーダー



図7 モバイルパスリーダー

図書館の造り・様子は、一見古き良き時代の図書館といった佇まい。館内は木製の書架や個人キャレルが多く、2012年QS世界大学ランキングでは東京大学（30位）と並ぶ程の最高レベルの大学（37位）、そして医学部という特性からか、個人学習での利用が多いように感じられる（図8）。

あるフロアでは、壁際に個人専用の棚がずらっと並び、そこに荷物や白衣を常時置いているような風景から1フロア帯が研修室化しているようであった。館内には、座席736席、申込予約制のGroup Study Room（図9）が4部屋66席、ロッカー216個が設置されている。座席は学年別に学習スペースを分けており、予約することで1年間利用することができる。座席の利用時間は6:30～24:00、貸出業務は20:00までとし、それ以降は警備員の巡回のみ、閲覧スペースのみの開館となる。



図8 個人キャレルの多い閲覧室

### ②アクティブ・ラーニング

館内は個人学習用スペースがほとんどで、普通のGroup Study Roomは4部屋のみ、ラーニング・commonsのような複数人のグループでアクティブ・ラーニングを行えるような空間は見られなかった。しかしながら、理系・医学部の学生が利用するという特性から、特に

そういった課題や学生からの要求がないの  
だろうと推測できる。「建物・施設ではなく、  
コンテンツの充実を重視しているのか」とい  
うこちらからの質問に対して、案内してくだ  
さった職員の方の回答は「当たり前です」。  
どれだけ資料を早く手に入れるのが重要、  
という理系の性質が非常に大きく表れてい  
る医学図書館であった。



図9 Group Study Room

## <利用者支援サービス>

### ①利用者教育

利用者支援サービスについては、中央図書館と同様のサービスを受けることができる。  
2011年に施設改修を行い、図書館内でデータベース教育を実施できるようになった。

利用者教育として、毎月データベース説明会を開催し、EndnoteやPubMed等の利用方  
法を教えている。毎回10～30人程度の参加があり、授業には司書が出向という形で講義を  
行っている。特別講義として外部講師を呼び、講習会を行う際は、50人程度は集まるとの  
こと。中央図書館同様、利用者の質問に答えるDotori onサービスをWeb上で実施してい  
る。

### ②研究支援

研究支援としては、Science Citation Index (SCI) というトムソン・ロイター社の自然  
科学分野の研究者や学生向けのデータベースを活用し、学術動向・学術雑誌・研究者の分析  
や必要となる書誌・引用情報の検索等、論文執筆のための支援を行っている。SCIは図書  
館のホームページ上のデータベース一覧から利用可能である。その他、図書館資料の収集等  
は、学部生よりも博士課程向けに対応し、専門的な分野への学習・研究支援を行えるよう整  
備している。

1992年に米国国立医学図書館(NLM)との二国間協定によるKOREA MEDLARS  
CENTER(韓国支部)を設立、国内の医療・保健専門家に医学情報検索サービスを提供し  
ており、ILLによって文献複写や相互貸借を受けることができる。

## <インターネット環境下での自主学習の推進>

韓国では、都市部と農村部での情報格差をなくすための国家プロジェクトとして、ICT  
の地方展開のためのモデル的取り組み「情報化村」を2001年より展開しており、高速イン  
ターネット網の構築や各家庭への高機能PCの普及推進に取り組んでいる。都市部での情報  
化の加速やそれを追うように農村部でも国や自治体による活動が盛んであり、各家庭は概ね  
インターネットが使える環境にある。2010年現在の携帯電話普及率は80%以上、モバイル  
ネットワークの普及率は90%以上となっている。

大学や学校内のみでなく、学生が自宅からでもリモートアクセスし、電子ジャーナルや電  
子ブックが閲覧できる環境作りに努めており、今後はさらにソフト面での充実を図ってい  
きたいとのことであった。医学図書館においては、2012年から冊子体と電子ジャーナルの両  
方あるものは、電子ジャーナルに切り替えているため、雑誌コーナーは冊子体が少なく、書  
架は余裕が多かった。医学雑誌は電子化が進んでいることもあり、どれだけ早く情報を取得

できるかに主眼を置いている。

### <職員研修>

医学図書館でも、研究支援サービスとして、Library Liaison & Research Support を業務の一つとしているが、中央図書館のように研究支援施設の設置と専任の人材による教室等に出向いてのサービスは実施しておらず、文献の検索方法や情報収集のアドバイス、データベースの活用方法等について、図書館内において説明会を実施している。以前は施設が十分でなかったため、図書館外に出向いて説明することもあったが、現在は施設（図 10）が整備されたこともあり、研究支援は館内で行っている。



図 10 利用者向け説明会（学習）施設

2012 年 5 月の NPO 法人日本医学図書館協会分科会において、韓国医学図書館協議会加盟館の司書から、韓国の医学図書館は、これまでの教育・診療に重点を置いたサービスから、研究支援サービス（研究課題設定・研究論文支援、研究業績管理）に比重が移行しているとの報告があったが、ソウル大学医学図書館では、医学文献引用・評価データベース等を活用した研究支援や利用者説明・アドバイス程度に留まっている。医学・医療分野の修士・博士学位を取得した人材の図書館職員採用方針は聞かれなかった。

しかしながら、ソウル大学医学図書館は、米国国立医学図書館（National Library of Medicine）が提供している無料公開医学文献データベース（PubMed）を構築している MEDLARS（Medical Literature Analysis and Retrieval System 医学文献分析・検索システム）の韓国支部業務を担っており、図書館内に専任担当者と専用スペースが設置され、韓国における医学情報提供の重要な役割を担っている自負が見られた。

### <ソウル大学における中央図書館と医学図書館の役割・機能>

ソウル大学医学図書館を視察したが、蓮建キャンパスは、大学病院をメインに医学部、歯学部、看護学部、公衆衛生学部が集合している医療系キャンパスであり、冠岳キャンパスとは雰囲気は違っていた。

中央図書館が多額の寄付で施設・設備等を新設しているのに対し、医学図書館では老朽化した部分の改修レベルでの対応であり、施設やサービス内容についても、概して日本の医学図書館と類似した印象を受けた。

また、ソウル大学は、2012 年より国立ソウル大学からソウル大学法人となった。このことによる図書館への影響を担当の方に確認したが、今のところその影響は見られないが、今後変化があるかもしれないとの返事をいただいた。

診療・臨床を抱えた医学部は、一般人文系学部・理系学部とは学生・教員のニーズが明らかに異なり、施設・サービス面の重点の置き方に違いが見られた。医学・医療に関する専門的な図書館サービスは医学図書館内で対応し、それ以外のサービスは、中央図書館や他学部図書館での施設利用・図書利用でサポートする体制となっており、各学部でのニーズに対して、分館がしっかりと担っていることを実感した。

## <研修雑感>

ソウル大学中央図書館訪問数日前に、訪問予定日の都合が悪くなりキャンセルとの連絡をいただいたが、(株)アメリカンドリーム社長より午後のスケジュールに変更してもらえるよう交渉の結果、午前は医学図書館に急遽の訪問となり、当日の朝に質問項目を通訳担当者に説明して、訪問に備えた。事前に通訳の方に質問事項の意味を十分に理解してもらうことが、海外訪問での相手先に質問内容を理解してもらう鍵となることが分かった。韓国では、通訳の方に、直訳では通じにくいと思われる我々の質問の趣旨を、できるだけ事前に理解してもらった上で訪問先に伝えてもらうことができたことは、小さなことではあるが、海外で意見交換する際の手法として一つの収穫であった。

今回の研修では、学部図書館の訪問はこの1校のみであり、非常に興味深く見学させていただいた。日本の学部図書館でもそうであるが、学部独自のニーズに重点を置いたサービスを行っており、医学図書館では医学情報コンテンツの提供に最も重点を置いており、サービスの方向性は、意外にも日本と同じであることが分かった。

医学図書館は専門図書館の要素が強く、大学図書館に見られるインフォメーション・commons等の施設(ハード)より、電子リソースのコンテンツ(ソフト)の充実が重要視されていることが確認できたことも大きな収穫であった。

## 注

### 1) 世界大学ランキング

英国TIMES社は2004年からQS社と提携してTIMES世界大学ランキングを公表してきたが、2010年より提携先をThomson Reuters社に変更した。QS社は、2010年より独自にQS世界大学ランキングを公表している。ソウル大学は、2004年は118位であったが年々上昇し、2012年は37位まで上昇した。一方、東大は、2004年は15位であったが、国際化(外国人教員比率・留学生比率)の遅れにより2012年は30位にまで後退した。

## 参考文献

- 1) THOMSON REUTERS, 2013, 『Science Citation Index Expanded』  
(<http://ip-science.thomsonreuters.jp/products/scie/>, 2013.2.6.)
- 2) Seoul National UNIVERSITY LIBRARY, (2012), 『Library Service Guide』.
- 3) Seoul National University Library, (2013), 『SEOUL NATIONAL UNIVERSITY LIBRARY HP』 (<http://library.snu.ac.kr/eng/index.ax>, 2013.2.6.)
- 4) 総務省, (2012), 『平成24年版情報通信白書 -ICTが導く震災復興・日本再生の道筋』  
(<http://www.soumu.go.jp/johotsusintokei/whitepaper/ja/h24/html/nc1134c0.html>, 2013.2.6.)

## 1.6. 私立延世大学図書館

### <大学概要>

延世大学は、韓国で最も古い私立大学で、キリスト教の宣教師によって 1885 年に設立された。ミッションとして、「真理と自由」の精神に基づき同胞と社会に貢献するリーダーを教育することを掲げており、現在までに 30 万人以上の卒業生を輩出している。大学はソウル市内の新村キャンパスと原州キャンパスに分かれており、教養学部、総合経営学部、経営学部、理学部、工学部、人文学部、保健学部、医学部等 22 の学部と 18 の大学院、133 の学科からなる、韓国最大規模の私立総合大学である。

学生は学部・大学院を併せて約 39,000 名が学び、教員約 4,800 名、一般職員約 7,000 名が働いている。

### <図書館概要>

新村キャンパスには、中央図書館、今回訪問した延世・三星（サムソン）学術情報センター、商経・経営図書館、音楽大学図書館、法学図書館、連合神学大学院図書館、国際学図書館、医学図書館の 8 館が設置、原州キャンパスには、原州キャンパス学術情報院が設置されている。2006 年には、ソウル市内にアジア初の大統領図書館である金大中図書館をオープンしている。

図書館の蔵書数は、合計で約 278 万冊であり、雑誌約 16,500 タイトル、電子ジャーナル約 58,600 タイトル、学術的なデータベース 314 点を持っている。また、国宝として評価された歴史のある貴重書を含む古書等も、100,000 点以上収集している。

延世大学図書館では、1990 年代の初めに韓国で最初に電子の管理システムを導入した。2007 年には、韓国で最初にサブジェクトライブラリアンサービスを導入する等、常に新しい取り組みを行っている。



図 1 延世・三星学術情報センター（左）  
中央図書館（右）

### ①延世・三星（サムソン）学術情報センターと中央図書館

延世大学学術情報センターは、大学創立 120 周年を記念して 2008 年に最先端 IT 基盤を備えた施設、延世・三星学術情報センターを既存の中央図書館に隣接した形（図 2）で開館した。

開館時間は、延世・三星学術情報センター、中央図書館ともに平日は 9:00～22:00、土曜日は 9:00～17:00、自習室は 6:00～23:00 となっており、各図書館に 24 時間利用できる部屋も用意している。座席数は、延世・三星学術情報センターと中央図書館を合わせると、約 5,500 席、PC は 740 台を備え、館内面積としては 54,262 平方メートルと韓国で一番大きい図書館となっている。

延世・三星学術情報センターは、①Ubiquitous Library（最先端 IT 基盤のコピキタス図書館）、②Cultural Library（豊かなコンテンツを楽しむことができる複合文化空間）、③Convenient Library（快適で多様な用途別オーダーメイド研究学習空間）の 3 つの機能

(Yonsei University 2012) を持っているのに対し、中央図書館は1階部分で延世・三星学術情報センターと接続しており、人文社会・科学技術・国学の資料を取り揃え、主題別専門司書による学習・研究支援を展開している。また自習室やグループセミナー室等が設置されており、資料を利用した学習に適した空間となっている。



図2 キャンパスマップ

#### <デジタル資料とアナログ資料の取り扱いについて>

延世大学図書館では、最先端のデジタル機材により構成された延世・三星学術情報センターと、伝統のあるアナログ資料を中心とした中央図書館を並列的に配置し、構造としては、国立デジタル図書館と国立中央図書館の位置付けと似たような構成であると感じた。

延世大学は、資料に応じてデジタル素材とアナログ素材を区分してサービスしており、ソウル大学に比べ、よりダイナミックに最新の図書館インフラとそれに見合った最高水準のサービス体制を戦略的に構築しているといえる。

#### <導入システム概要>

延世大学図書館は、ExLibris社のトータルパッケージ製品(SFX、MetaLib、Primo、ALEPH、Verde、DigiTool)を導入している。その導入にあたっては、一定の商品コンセプトの下でのサービスを中心とした体制構築、学術・研究・授業サポートの強化、業務生産性の向上、最先端の情報技術基盤の採用等、研究中心大学としての教育と研究を効率的に支援する国際競争力を備えた機能を備える点を評価している。

学内の認証基盤とも連携し、Proxyによるリモートアクセスにも対応し、利用者にとっては、最適な環境が提供されている。

#### <施設・設備>

##### ①概要

延世・三星学術情報センターについて、前述した3つの機能別に施設・設備紹介を行う。

##### a) Ubiquitous Library

Ubiquitous Library(最先端IT基盤のユビキタス図書館)の施設・設備として、まずIC(RFID)の学生証を利用した統合管理運営システムが挙げられる。入退館、座席・施設の予約、PCロッカーの利用等、学生証1枚で全学のシステムを利用することができる。見学時にも学生が慣れた動作で、館内にあるキオスク端末(図3)から座席の確保を行っていた。その他、1階入館ゲートの前に広がるU-Loungeと呼ばれるスペースには、図書館案内やキャンパスマップ等の情報を見ることができる52インチのLCD5台で構成された大型案内システム(図4)、学生自身が特定の個人やグループ、利用者全体に対して忘れ物やバイト情

報、お知らせ・広告等、メッセージを送ることのできる Memoboard (図 5)、動画・写真・テキスト・IPTV 等マルチメディアコンテンツを複数人で鑑賞できるブース MOD (図 6)、Pond と呼ばれる鯉が泳ぐパネルが埋めこまれた休憩スペース (図 7) や外国人利用者のための英語、中国語、日本語、ロシア語、フランス語、ドイツ語の 6ヶ国の OS 搭載 PC スペースである Global PC Island (図 8) 等、最先端の機器類が導入されていた。



図 3 キオスク端末



図 4 大型案内システム



図 5 Memoboard



図 6 MOD



図 7 Pond (休憩スペース)



図 8 Global PC Island

## b) Cultural Library

Cultural Library（豊かなコンテンツを楽しむことができる複合文化空間）では、マルチメディアコンテンツを制作・活用するための施設を紹介したい。1階のU-Loungeには、全世界で発行された1,100種の新聞を40種類以上の言語でデジタル新聞として大型スクリーンで閲覧可能なNewspaper（図9）、42インチのLCD上で実物の図書のようにページをめくりながら閲覧することのできるDigital Book（図10）、あえてキーボードを置かずにタッチスクリーンのみで学生証で認証を行う電子ブック専用閲覧端末My eBookコーナー（図11）がある。ちなみにDigital Bookでは、新刊図書、ベストセラー、司書推薦図書、延世必読図書の4つのカテゴリーの資料が提供されており、著作権で限定された範囲内で閲覧可能となっている。2階のInformation commonsには、Blu-ray・DVD・VHS閲覧席（図12）、3階にはメディアを制作・編集するための施設として、ブルースクリーンに照明やHDカメラが設置されたメディア制作室（図13）がある。またメディアを鑑賞するための施設としては、5.1チャンネルドルビーサラウンドシステムを備えた40席規模の小劇場メディア鑑賞室（図14）が設置されている。案内してくださった職員の方の話によると、おそらく授業等でもマルチメディアコンテンツの制作が課題として出されているのだろう、とのことであった。特に授業や教員と連携して施設の利用を促進しているわけではないようで、施設・設備をさらに充実させるためには、学部や教員に働きかけることで利用促進や学習の場として発展していけるのではないかと感じた。

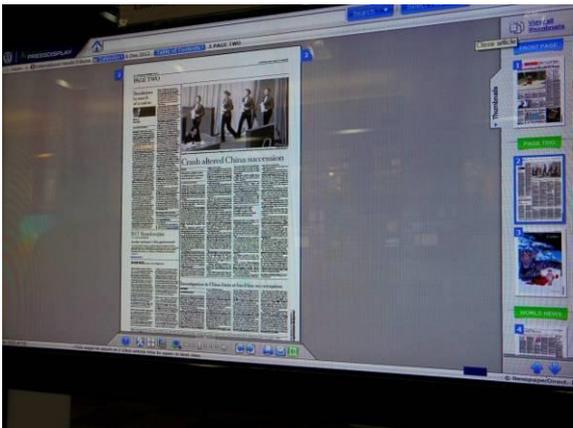


図9 Newspaper



図10 Digital Book



図11 My eBook コーナー



図12 DVD 閲覧席



図 13 メディア制作室



図 14 メディア鑑賞室

### c) Convenient Library

Convenient Library（快適で多様な用途別オーダーメイド研究学習空間）では、1階から上階へと続く階段沿いに広がるスペースに、各々の学習形態に合わせたコーナーが設置されている。複数人のグループでディスカッションしながら学習のできる協業室（図 15）、課題遂行に必要なソフトウェアを搭載した PC、プリント・スキャニングサービスを利用できる課題遂行コーナー（図 16）、海外及び国内学術データベースを検索・利用できる学術情報検索コーナー（図 17）、学習の合間に休憩できる屋上庭園やカフェ（図 18）、男／女個別休憩室等がある。



図 15 協業室



図 16 課題遂行コーナー

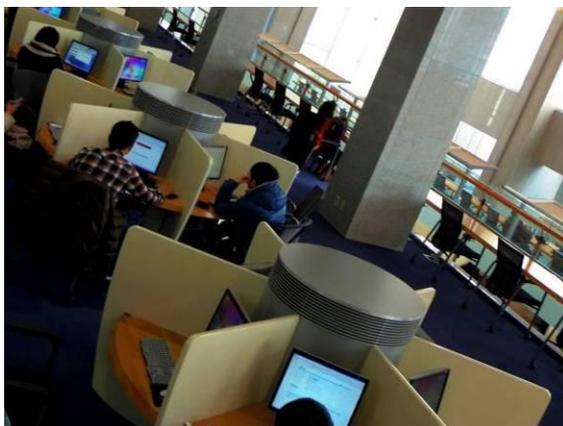


図 17 学術情報検索コーナー



図 18 屋上庭園とカフェ

## ②アクティブ・ラーニングについて

前述したように、館内には協業室や、その他にもプレゼンテーションルーム等、グループスタディやプレゼンができる部屋をいくつか設置している。ただ、ラーニング・コモンズのように、可動式の机等は館内には見られず、グループ学習よりも主に個人での学びを大切にしているように感じた。また、アクティブ・ラーニング等のスペースを必要と感じているか質問したところ、来年に建設予定のインフォメーション・コモンズでは、このような仕掛けも取り入れるとのことであった。

### <利用者支援サービス>

#### ①利用者教育

利用者教育としては、大学では1年生を対象に必修科目としてライティング教育を行っており、そのうちの3コマを司書が資料活用や、電子ジャーナル、電子ブックの利用方法等を教えている。そういった熱心な利用教育を行っていることや、豊富な電子媒体の資料を所蔵していることもあり、学生は一般的に、紙媒体の資料より、電子媒体の資料を利用している。

#### ②オンライン提供コンテンツ

その他、語学学習教材をオンラインで提供しており、携帯端末からの利用、自宅からの利用も可能となっているため、学生には幅広く利用されている。このサービスについては、卒業生が勤める企業から寄付してもらっているとのことであった。グローバル化が進む中、まだまだ日本ではこういったサービスを提供しているところは少ない。

#### ③広報の現状について

Twitter、facebook、E-mail、館内モニター・映像類、図書館発行の新聞にて、図書館の広報活動を行っているという。最近紙媒体のポスター等掲示物を館内に掲示していないとのこと、見学時にもこれらの掲示を目にすることはなかった。館内の至るところにポスター等を貼り過ぎてしまうことで風景化し、利用者の目に慣れてしまうことは多々あることから、館内の大型ディスプレイ等、掲示を一本化し、ここさえ確認すれば図書館の活動について情報を収集できる、と利用者に認識させるための一つ的手段としては有効かもしれない。

### <司書研修及び専門的業務>

2007年、学術情報サービスの質的向上を目指すために、主題専門サービス及び学術コミュニケーション支援を通じた研究支援基盤の強化を目指す新たなサービスを開始した。具体的には、該当の学問を専攻した主題専門司書による主題分野の蔵書開発、講義及び研究支援サービス、情報検索教育、研究情報の調査、学術情報相談等のサービスであり、現在、専門分野（現在、医学を除く16分野）の修士以上の学位を持っている12名の専門司書が業務を担当している。

Yonsei University Library Guide（日本語版 延世大学学術情報センターガイド）パンフレットには、その業務内容として、①該当分野の学会動向と出版傾向を把握し、蔵書とすべき図書及びWeb資源、デジタルコンテンツを発掘・提供する、②学科との窓口を担当する、③専攻分野にあったデータベース利用教育の実施と教授からの要望により授業での教育を担当する、④研究情報の調査として、研究関連分野の先行研究資料に対する事前の調査及び資料収集サービスを提供する、と記載されている（Yonsei University 2012）。

延世大学の各専攻分野の修士課程以上の学生を図書館にスカウト・採用し、入職後 4 年以内に図書館情報学の修士号以上の学位を取得させているとのことであった。この点は、ソウル大学における司書として採用後、主題別の専門知識を取得させる主題別専門司書制度とは異なる。最高の図書館インフラとそれに相応しい最高のサービスを提供することで、韓国トップの私立大学としての誇りが感じられた。

今回の視察では、具体的事例や評価まで伺うことはできなかったが、我が国でも試行的または部分的に導入できるものであるか、取り組み大学における今後の事例報告と自己評価の公表を期待したい。

なお、医学分野での主題別専門司書の不在について確認したところ、キャンパスが別であり、医学部は他の分館と違い、規定 (Regulation) により、延世大学医療院 (大学附属病院の総称) の予算編成指針により運営されているとの説明があり、大学予算とは別扱いのため、図書館政策・運営も異なるとのことであった。

### <寄付の戦略>

韓国の一流私立大学であり、多くの企業家を輩出してきた延世大学は、羨むほどの先進的施設が寄付により設置されていることが施設見学で確認できた。

延世・三星 (サムソン) 情報センターは、サムソン電子グループの寄付により設立されており、館内の施設も各々の個別施設毎に寄贈者の名前が入ったものとなっており、GS カルテックス社と共同での PC 施設、LG バッテリーチャージ機器、その他多くの施設・備品が設置されていた。金色に輝く寄付者銘板が壁面一杯に設置されていたのが印象的であった。

寄付を継続的に受けるには、リサーチに基づいた戦略と、計画性・持続性が必要といえる。延世大学では、経営系学部、経営大学院、生命工学科等でベンチャー学、リーダーシップワークショップ等の起業教育を実施している。また、企業支援として、延世大学産学協力団が 2004 年に設立、知財管理、技術移転に関する教育・訓練を実施している。延世大学同窓会も同窓ポータルシステムとして統合データベース化され、人脈ネットワーク構築と同窓生と母校の繋がり強化を図っており (経済産業省関東経済産業局 2012: 125)、これらの取り組みは寄付を受ける土壌を生成している。

延世大学は、韓国の慶應義塾大学といわれているが、同窓生との繋がりが強いのと同時に、常に情報発信して社会と深い連携を持った取り組みを行っており、社会的評価を得ることが、寄付を受ける大学の本来の在り方かもしれない。

### <司書との懇談>

延世大学においても、1 時間程度、こちらで用意していた質問事項を中心に意見交換を行うことができた。他大学と比べ、延世大学においては、自分達は韓国でもトップの大学であるという誇りを持っているということを意見交換している節々で感じられた。

たとえば、「図書館システムのフルパッケージを導入したのは本学が一番早かった」と自負しておられたことはその一例である。また、「現在韓国では主題別専門司書を採用しようという流れはあるが、本学ほど充実していない」ということも自信をもって、話しておられた。ただ、こういった言動の裏には、図書館システムやデジタル機器の選定や整備を担当するデジタルメディア部という部署を設け、その職員も全て司書で構成していたり、主題別専門司書においても、専門分野の修士以上の学歴保有者を採用し、採用後に図書館情報学の修士をとらせるという、他大学ではなかなか真似のできない手厚い体制を整えている。

また、他大学では日本同様に、少しずつ分類や整理業務等の業務委託が進んでいる中、延

世大学では全て自分の大学で行っているということも話されていた。

他大学の図書館と比べても、延世大学は、施設・設備・体制すべてにおいて充実しており、韓国でもトップであるということは間違いないと言える図書館であった。

#### 引用（参考）文献

- 1) 経済産業省関東経済産業局, (2012), 『参考資料 海外大学における企業家輩出・企業支援環境』, 99-130 ([http://www.kanto.meti.go.jp/seisaku/gizyutsu/internship/data/18FYreport\\_reference.pdf](http://www.kanto.meti.go.jp/seisaku/gizyutsu/internship/data/18FYreport_reference.pdf), 2013.2.6.)
- 2) YONSEI UNIVERSITY, 2012, 『YONSEI UNIVERSITY 2012 : 127 YEARS and Beyond』.
- 3) YONSEI UNIVERSITY, (2012), 『延世大学学術情報センター : Yonsei University Library Guide』.
- 4) YONSEI UNIVERSITY, (2012), 『YONSEI UNIVERSITY HP』  
(<http://www.yonsei.ac.kr/eng/index.asp>, 2013.2.6.)
- 5) YONSEI UNIVERSITY, (2012), 『YONSEI UNIVERSITY WONJU CAMPUS HP』  
(<http://eco.yonsei.ac.kr/jap/index.asp>, 2013.2.6.)

## 1.7. 私立梨花女子大学中央図書館

### <大学概要>

梨花女子大学 (Ewha Womans University) は、ソウル特別市西大門区に、1886年に韓国で最初に設立された女子大学である。学部は人文科学・社会科学・自然科学・工学・音楽・芸術・教育学・経営学・薬学等、12学部 (College) と15の一般・専門・特殊大学院を設置する総合大学である。学生は学部・大学院を併せて約20,000人が学び、常勤教授890人、事務職員369人が働いている。

### <図書館概要>

キャンパス内 (図1) には、中央図書館 (以下、Central Library) の他、法学図書館、音楽図書館、神学図書館、工学図書館の5つの図書館と、附属病院内に医学図書館がある。

Central Library (図2) は1923年に設立、1984年に移転された。授業期間中の開館時間は9:00~21:00 (土曜は15:00閉館)、休暇中の開館時間は、夏期は9:00~19:00、冬期は9:00~17:00 (共に土曜は15:00閉館) となっている。設立当時、図書2,000冊からの開館であったが、現在は雑誌約9,000タイトル、電子ジャーナル約3,700タイトルや電子ブック約10万点等、160万冊の蔵書を所蔵する図書館となった。

建物は地下1階から5階までの6フロアで5階部分には法学図書館が設けられている。フロア構成は、1階は閉架式保存書庫 (製本雑誌含む)、2階は入退館ゲート、閲覧室、未製本雑誌、情報検索案内デスク、3階~5階は図書の分野別に書架が設置されている。決して最新式の施設ではないが、書架や備品等からは懐かしさと親しみを感じる。

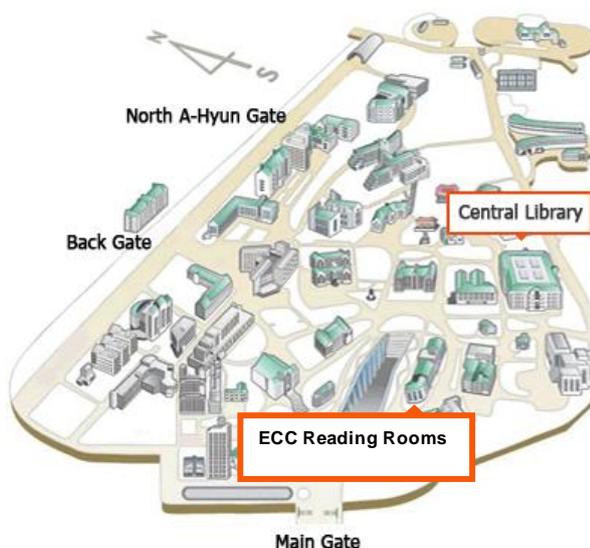


図1 キャンパスマップ



図2 Central Library (中央図書館)



図3 ECC (Ewha Campus Complex) 前にて  
右より3人目が Suk Jin-Hyung 女史

ECC Reading Rooms は、2008年5月に開館した ECC (Ewha Campus Complex) (図3) と呼ばれる全面ガラス張りの複合施設内に位置する。ECC 内には、seminar rooms 42 部屋の他、gallery や movie theater、fitness center 等を設けており、各種コンサートや学内講演会等が開催される Samsung Hall (図11) が学内外で有名である。その他は、事務空間、授業・学習空間等として利用されており、図書館とは対照的な近代的施設である。ECC Reading Rooms 内には資料を置かず、1,000 席の閲覧席スペースとなっている。開館時間は毎日 6:00~20:00、入館の際に座席予約システムによる手続きを行うことで利用することができる。

## <施設・設備>

### ①概要

今回は、中央図書館司書の Suk Jin-Hyung 女史 (図3) に、Central Library と ECC Reading Rooms を案内していただいた。

#### a) Central Library

重厚な造りの Central Library は、2階の入館ゲートを入ってすぐの場所にソファと閲覧席、就職関係資料が配架されている閲覧スペース (図4) と、情報検索コーナー (図5) がある。情報検索コーナーには、国立国会図書館所蔵資料利用のための専用端末が設置されており、情報検索に関するデスクには人員が配置されていた。また、EBSCOhost や JSTOR 等データベースの利用案内を作成し、パンフレットスタンドにて配布している (図6)。1階には PC Room や AV Room、地下1階は Reading Room フロアで、試験期間中ということもあり、学生でほとんどの席が埋まっていた。3階には、女子大学の特徴的なコレクションとして Woman's Studies Collection (女性学資料) が配架されている。また4階には教育学・社会科学分野の資料が配架されていた。これらの資料は、FRIC (Foreign Research Information Center) として、韓国の9つの大学が外国の学術資料を主題別に分担して収集する取り組みに梨花女子大学は参加しており、該当分野の資料を担当しているとのことであった。5階は3、4階と同様に資料と閲覧スペースの他、Law Library (法学図書館) が設置されている。館内で興味を引いたのは、ソファや閲覧机に本が無造作に置かれ、利用後片付けずに去ってしまったような光景を目にしたことである。最初は忘れ物かとも思ったが、わざと利用者に使い終わった図書をそのまま置いていってもらい、配架ミス等を防ぐための大胆な取り組みであることがわかった (図7)。



図4 1階閲覧スペース



図5 情報検索コーナー



図 6 データベース利用案内



図 7 配架ミスを防ぐための取り組み

## b) ECC Reading Rooms

Central Library の正面玄関から外へ出て少し歩くと、地下 1 階～地下 6 階で構成される ECC へ入るためのガラス張りのエレベーターがあり、地下 3 階で降り、そのまま通路を歩いて行くと、明るい日差しと話し声が響く Reading Rooms の入口が見えてきた。

ECC Reading Rooms (図 8) は、入館する際に学生証を用いてキオスク端末から座席予約を行う形での閲覧席のみの学習スペースとなっており、学生と同窓生のみ利用可能である。試験期間は 24 時間利用可能で、見学時にも次から次へと学生が来館し、慣れた動作で座席予約、入館を行っていた。また入口には、無人返却機 (図 9) が設置されており、わざわざ Central Library に行かなくても図書の返却が可能となっている。



図 8 ECC Reading Rooms



図 9 無人返却機

本来であれば、延世大学のように図書館新館の中に学習室が設置されるのが一般的であるが、梨花女子大学は図書館という狭い枠から飛び出し、学生が快適に過ごせる大学複合施設の中に近代的な 24 時間対応学習施設である Reading Rooms、タッチパネル式座席予約システム、図書館システムと連動した先進的な図書返却システム装置を設置しており、ECC 建築の斬新さとともに、大学における図書館の在り方について一つの提言となっていた。今後、どのような独自性のある新図書館が設置されるか楽しみである。

## ②アクティブ・ラーニング

梨花女子大学を含め、他の大学においても座席予約システムを導入しているところが多かったように感じる。グループ学習等ができるスペース（図 10）はあるものの、どちらかという個人での学びに重きを置いているように感じられた。一方、日本では座席予約システムを導入している大学図書館は少なく、昨今はアクティブ・ラーニング等、図書館内でもグループ学習等を支援する傾向にある。そういった部分で、学びのスタイルの違いを感じた。



図 10 Study Room

## <利用者支援サービス>

### ①利用者教育

利用者教育としては、学部生・大学院生を対象とした情報検索教育や学部 1 年生を対象とした参考文献作成方法の講習会やライティング指導を行っている。資料検索方法、データベースや電子ジャーナルの利用教育については定期的に講習を実施しており、資料は常時図書館内にて配布を行っている。また、教員からの要望に応じて、ライティング指導を実施している。なお、利用教育を来館して直接受けられない学生のために、図書館ホームページ上にオンラインチュートリアルを掲載している。その中でクイズを出し、クイズに答えて来館した学生には景品をプレゼントするといった特典（インセンティブ）を設け、利用促進のための工夫を行っている。

### ②学習・研究支援

学習・研究支援としては、主題別専門司書による学習・研究支援を行っており、レファレンスについては序々に利用頻度が上がってきている状況にある。E-mail による質問も受け付けている。

ここで特筆すべき点は、梨花女子大学の研究者や学生の研究動向やニーズを把握するために行っている、多様な情報収集方法である。各学科のホームページ、ホームページ上のシラバス、リポジトリ、学内報道資料等、様々なツールを介して調査を行い、研究動向や利用者のニーズを把握するよう努めている。ただし、教員の研究室訪問については行っていないということであったが、電子ジャーナルやデータベース等の利用統計の調査を実施し、利用者のニーズに合わせた、きめの細かいサービスを行っている。

また、教員対象サービスとしては、教員からの要望を受け、司書が講師として授業で資料の検索方法を教えたり、図書館情報学に関係する授業については部分的に試験問題を作成する等の支援を行っている。

### ③オンライン提供コンテンツ

図書館の資料検索方法の指導等、講習会の映像を録画して、Web 上で公開している。参考文献の作成方法についても専攻科目によって異なるため、各学科別にコンテンツを設け、提供している。携帯電話からも利用できるサービスとなっている。

### <司書研修及び専門的業務>

梨花女子大学においても、教員の研究・教育活動への積極的な支援を実施している。具体的には、教員や大学院生の研究動向の把握、国の研究・教育・授業に関する政策変化のチェック、大学の専攻等の変化の把握、授業内容・課題を把握、学生にどのような情報をサービスするかを理解、dCollection（大学リポジトリ）での研究業績・研究主題、主題分野別の研究の流れを把握することを心掛けているとのこと。最近では、主題別研究支援サービスが拡大され、人文学、社会科学、法学、健康科学、教育学、音楽、神学、経営学、国際学、工学、造形技術学、医学（医療）に関する主題別専門司書が情報調査支援を行い、情報検索教育、各科専攻別主題ガイドを担当し Web にも情報を掲載しているとのことであった。司書教育としては、業務と関係のあるワークショップに参加、主題担当司書に対しては、上級学校への進学も勧めている。延世大学のような主題別専門司書の採用・教育システムまでには至っていないが、司書採用後、司書対象教育プログラムや、主題別司書の外部教育（Off-JT）に参加させている。

専門的業務としては、教員からの要望に応じて、図書館の所蔵資料や電子資料、Web サイト等の活用方法の提供、授業に必要な資料の提供を行っている。さらに、試験問題作成とその情報源の提供、授業の中では資料検索方法についての講義を行っている。また、利用者からの要望に応じて、教育プログラム設計支援サービスを実施、学部生、院生に対しては 75 分程度の情報検索教育を実施している。その他、1 年生のセミナーでライティング指導、参考文献作成方法の指導、閲覧室内の情報検索案内デスクでの検索支援を実施している。

梨花女子大学では学内の研究動向について常に調査し、教員と学生が要望する情報調査支援や利用教育を実施しており、大学の構成員と機関との関係を強化することで、情報センターとして各研究機関と連携した情報サービスを拡大している。利用教育満足度調査では学生・教員に高い評価を得ているという。様々な情報を収集・活用し、図書館の満足度を高めることは、大学の目標達成にも寄与できるとのことであった。

### <同窓生へのサービスと寄付施設>

学生で賑わう複合施設 ECC も多くの寄付により設立されたもので、学生は施設を使うことで、企業に対するイメージも自ずと違うものとなってくるであろうし、授業施設のみでなく、コンサートホール（図 11）・映画館も備えたキャンパスライフそのものの施設提供は、PR 効果も大きい。

大学図書館のミッションは、大学のミッションへの寄与、研究教育成果創出の支援、大学研究学習基盤の確立と社会への寄与とされており、最終目標である社会への寄与は社会からの評価ともなり、その成果の一つとして寄付の形で大学に反映されている。大学図書館利用案内にも、同窓生（Alumni）に対する施設利用・サービス利用の案内が記載され、社会に開かれた女子大学としての運営を行うことで、大学を取り巻くステークホルダーへの説明責任と社会への情報開示を果たし、大学としての存在価値を高めることに貢献している。

現在の梨花女子大学図書館は 1984 年 5 月に移転したもので、施設として 28 年経過していることもあり、斬新さは感じられなかったが、何よりもきめ細やかな司書のサービスと訪



図 11 ECC Samsung Hall

問者への心遣いが行き届いていることが印象的であり、将来、寄付等により、梨花女子大学独自の特色を持った新図書館ができることを期待したい。

### <デジタル情報とアナログ情報の取り扱い>

梨花女子大学図書館の電子化への取り組みは、1997年から電子図書館システムとして開始され、本学所蔵資料のデジタル化を開始した。2002年から、電子図書館システム改編事業により、大学における研究情報の電子化を開始し、2005年2月に学内学術情報のdCollectionへの登録（リポジトリ化）が行われた。

一方、アナログ資料についての取り組みとしては、FRIC (Foreign Research Information Center : 外国学術情報支援センター) として国家的に支援されているサービスに参加しており、主題別に学術情報を収集する9大学の一つとして「Education, Social Science : 教育学・社会科学分野」を担当している。このサービスにより、利用者は無料で該当分野の外国学術文献のコピーを入手できる。図書館フロアでは、2階に新聞書架や就職・留学の資料が展示されていたり、国立国会図書館専用PCが設置されており、提供される資料の一部も見られるようになっていた。展示棚には司書が作成した情報検索データベース別の利用案内パンフレットが並び、教員が選定した指定図書（館内閲覧用）が展示されていた。未製本雑誌がかなりのスペースで所蔵されており、製本後は4階書架に配架されている。

3階には女性学資料室 (Women's Studies Collection) と古書 (Rare Books Collection) 書架があり、開架書庫が満杯となり、1階の閉架保存書庫に順次降ろしているとのことで、アナログ資料の取り扱いも従来と同じように対応していた。また、「Window on America」と書かれた展示棚 (図12) には、アメリカ大使館より無料で冊子が提供され、持ち出し自由となっていた。

館内を案内されながら、古き良き時代の図書館を懐かしく思い出していた。梨花女子大学図書館は、女子校らしく現存施設を大切に、その枠の中で冊子の持つ特性を大切にされた情報提供サービスをきちんと実施していた。



図12 Window on America 展示棚

### <訪問所感>

今回の梨花女子大学の訪問は、当初から研修日程に組み込まれていたわけではない。参加者間で話し合った結果、研修で海外の大学図書館を巡ることのできる貴重な機会を有効活用するため、参加者の所属大学の協定校であった梨花女子大学に自分たちでアポイントメントを取り、訪問させていただく運びとなった。

梨花女子大学の大きな特徴は、昔ながらの図書館といった佇まいの Central Library と試験期間中は24時間対応、完全予約制の個人学習室 ECC Reading Rooms の2つが作用していることである。前述の通り、ECC Reading Rooms は事務室・教室・その他キャンパスライフで使用する様々な空間を備えた複合施設である ECC の中に位置している。ECC 自体が正門近くの立地のよい場所にあるため、学生の出入りも多いが、過去には観光客の出入りが多くなってしまったこともあり、現在は建物に入る際に学生証による認証を行っているという。個人的には図書館の資料を読みながら勉強したいと考える学生もいるのでは、と思う

が、そこはおそらく Central Library と ECC Reading Rooms の使い分けを学生自身が行っていることと、電子化が進む韓国だからこそ、資料のない学習室でも大いに活用できるといったことが考えられる。訪問時には、Central Library をはじめ、ECC 内の学習室等、多くの学生が勉強に励んでいる姿が印象的であった。

これらの背景には、Suk Jin-Hyung 女史によるプレゼンテーションや質疑応答でもあった、教員や大学院生の研究動向の把握における多種多様な手段での情報収集が重要な役割を担っているのであろう。「そこまでは手が回らない」と、教員の研究室訪問は行っていないということであったが、行わずしてニーズを把握し、教員を援助して試験問題を共同で作成する等のきめ細かなサービスができていることが特筆すべき点である。プレゼンテーションの冒頭で説明のあった、図書館のミッション「研究者に対して大学図書館から協力体制を敷き、多くの資料を利用してもらい、多くの研究成果を生み出してもらうこと」に対して、忠実に取り組んだ結果がキャンパス内で勉強に励む学生たちの姿から感じ取ることができた。

#### 参考文献

- 1) EWHA WOMANS UNIVERSITY, (2012), 『Ewha Womans University Campus Guide Map』 ([http://www.ewha.ac.kr/english/html/campusmap\\_eng/Map.html#](http://www.ewha.ac.kr/english/html/campusmap_eng/Map.html#), 2013.2.6.)
- 2) EWHA WOMANS UNIVERSITY, (2013), 『EWHA WOMANS UNIVERSITY HP』 (<http://www.ewha.ac.kr/>, 2013.2.6.)
- 3) EWHA WOMANS UNIVERSITY LIBRARY, 2012, 『Library Guide』.
- 4) EWHA WOMANS UNIVERSITY LIBRARY, (2013), 『EWHA WOMANS UNIVERSITY LIBRARY HP』 (<http://lib.ewha.ac.kr/>, 2013.2.6.)

## 2. 訪問機関概要（台湾）

### 2.1. 台湾情報化事情

#### <台湾の電子化事情>

2009年8月に「數位出版産業發展策略與行動計畫(電子出版産業發展策略及び行動計畫)」という電子出版産業に関する5カ年計画(2009～2013)が台湾の行政府である行政院で承認された。5年間で21.34億台湾元(約60億円)を投じて、台湾の電子書籍産業の拡大を図る計画である。

2013年までにこの計画が到達すべき目標としているのは、以下の通りである。

#### 1. 国際協力の強化

- (1) 電子出版業における上流、中流、下流の階層の完全な繋がりを構築する。
- (2) 国内外の市場において5年間で1,000億台湾元(約2,600億円)分を電子出版産業で生産する。

#### 2. 中国語電子出版市場の拡大

- (1) 2～3の中国語電子書籍コンテンツの取引センター構築を推進する。
- (2) 電子出版産業に対して5年間で計100億台湾元(約260億円)を投資する。
- (3) 10万冊の中国語電子書籍が流通する市場の構築を推進する。

#### 3. 品質の高い読書ができる社会の促進

- (1) 100万人の電子書籍閲覧人口を創出する。
- (2) メディアの枠を超えて新しい出版サービスを10以上創出する。
- (3) 中国語社会の読者の経験モデルをつくる。

iPhone や iPad は台湾に本社を置く鴻海精密工業によって製造されている。その他のメーカーの端末の製造においても台湾企業が数多く受注している。昨今の電子書籍の分野は、台湾のハードウェア生産能力を背景として、コンテンツ産業の成長を図れる可能性があり、この点は政府が支援に乗り出す根拠ともなっている。

以上のように台湾は国家レベルで電子化を推進している状況にある。しかしながら、実情として約2,300万人の台湾市場は出版マーケットとしてそもそも小さい。台湾の出版社は日本や欧米の出版社から著作権を買い取り、翻訳を行ってから出版している。これらの翻訳ものを電子出版化する権利は台湾側ではなく、オリジナル版を出版した国外の出版社にあることから、台湾の電子化市場で流通するコンテンツは非常に限られている(田所2011: 3)。近年、不景気により出版業界の売り上げは横ばいが続いているが、電子化は直接的な要因とはなっていない模様である。



図1 紀伊國屋書店 台北微風店

### <紀伊國屋書店 台北微風店>

台湾の大学図書館見学に先立ち、紀伊國屋書店 台北微風店（図1・図2）を訪問した。日本企業資本の書店のため、店内の書籍・雑誌のうちかなりの割合を日本書が占めていた。店内は日本の大型書店と比べても遜色ない品揃えと内装が施されており、台湾における日系企業の浸透度合いを垣間見ることができた。

紀伊國屋書店では、日本語教育の一環として、国立高雄第一科技大學図書館のレファレンスカウンターに人員を派遣し、駐在することがあるという。その他、大学図書館との連携としては、テーマ展示の際の選書等について援助を行っている。ただ、日本の大学図書館が行っているようなブックハンティング等、大学図書館と書店とが連携したイベントは実施していない。



図2 店内の様子

### 引用（参考）文献

- 1) 日本出版学会, 2010, 日本出版学会編著『白書出版産業 2010 –データとチャートで読む出版の現在–』文化通信社, 188-9.
- 2) 田所陽一, 2011, 「台湾デジタルコンテンツビジネス事情 –電子書籍を中心に–」『交流』財団法人交流協会, 1-7.
- 3) 台湾政府經濟部工業局, 2011, 『智慧生活應用推動計畫』（<http://www.iliving.org.tw/ctz>, 2013.2.6.）

## 2.2. 國立高雄第一科技大學図書館

### <大学概要>

國立高雄第一科技大學（National Kaohsiung First University of Science and Technology）は、1995年9月に創立された台湾の国立大学である。工、管理、外国語、電機情報、財務金融等の5学院（学部）、15学系（学科）、29研究所（研究科）を備える。外国語学部には日本語学科も設置され、訪問当日は日本語学科の学生にも同席いただいた。また、高雄は台湾随一の工業都市であり、國立高雄第一科技大學は近隣の企業と密接なコネクションを持っている。

2012年現在、学部生・大学院生は7,600人。キャンパス面積は750,000㎡。台湾第二の規模を誇る高雄から離れた場所にあり、都心の喧騒とは無縁の広々としたキャンパスだった。



図1 國立高雄第一科技大學キャンパスマップ

### <図書館概要>

大学自体が比較的新しい組織であることから、図書館については設立時から電子化への構想があったという。設立時には別の施設だった図書館とコンピュータセンターが2001年に合併し、電子化を見据えた複合施設として現在に至る。

図書館の資料構成としても、2011年現在、図書及び視聴覚資料288,527点に対し、電子ブックは302,063点と、冊子体よりも電子媒体の方が多い。2010年に冊子体と電子媒体の冊数が並び、2011年に電子媒体が冊子体の冊数を抜いたということであった。

開館時間は、平日は8:30~22:00、土曜日は9:00~22:00、日曜日は9:00~17:00、学習室は8:30~23:00（土日は9:00~23:00）である。

各フロアは、地下1階に自習室、1階に後述の第e書房、2階がレファレンス、貸出返却カウンター（自動貸出機を2台設置）、PCエリア（30台設置）、雑誌、3~5階は図書や書庫、閲覧席で構成されている。

訪問当日はちょうど学園祭が開催されており、図書館内は利用者が少なく、静かな空間が保たれていた。学生数に対して規模の大きな図書館であり、書架の配置もかなり余裕があった。



図2 国立高雄第一科技大學図書館（外観）



図3 図書館（内観）

### <導入システム概要>

図書館システムは、Innovative Interfaces 社のパッケージ製品（INNOPAC）を導入している。現在では、統合検索、機関リポジトリ（Dspace 環境を拡張）を導入し、認証基盤を含めた各システムの導入及び連携については、情報系部門と共同で行い、VPN によるリモートアクセスを可能としている。

### <施設・設備>

#### ①概要

##### a) 第e書房

地下1階から6階までの図書館スペースのうち、特筆すべき施設・設備は2012年5月に1階に開設された“第e書房”と呼ばれる、ラーニング・コモンズである。アメリカや香港、台湾の大学図書館を参考に館長自らがデザイン設計に携わり、居心地の良い空間が整備されている。

入館して最初に気がついたことは、微かに聴こえてくる音楽だ。BGMとして音楽を流し、リラックスのできる癒しの空間を演出しているようである。

また、学習形態・環境によってブースが区切られている。少人数でディスカッションできるブース（図4）、大きなクッションが置いてあり靴を脱いで床に腰を下ろす形のブース（図5）、多人数で映像を見ながらディスカッションできるブース（図6）や討論室（図7）、掘りごたつ式の和室（図8）、階段に腰を下ろす形でのプレゼンテーションルーム（図9）が設置され、一人でもグループでも気軽に利用することができ、多種多様なシーンに応じて、個人の好みの空間で過ごすことができる。なお、和室を設置した背景には日本語学科があるため、その学生たちに学習しやすい環境を提供しているとのことだった。

機器類はiMacやタッチスクリーン型のPC35台、座席数230席を設置、資料は一般誌や新着図書が配架されていた。学内には無線LANが整備されており、図書館では貸出用ノートパソコンとiPadがあり、貸出はバーコードで管理されていた。中でもiPadは予約でいっぱい、なかなか利用できないとのことであった。



図4 少人数ブース



図5 クッションブース



図6 映像鑑賞ブース



図7 討論室



図8 和室の討論室

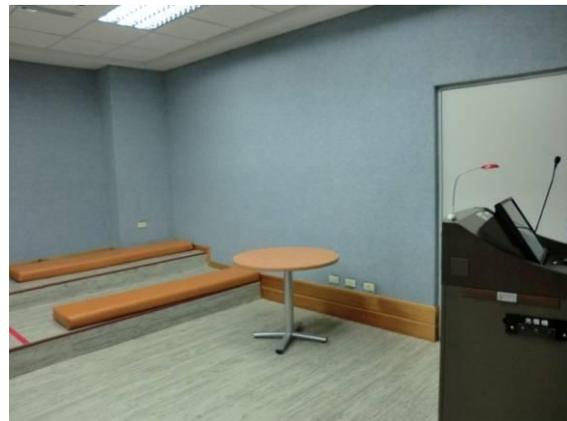


図9 プレゼンテーションルーム

## b) 図書資訊館

第e書房以外のフロアは、入退館ゲートのある2階から上階に向かって中央部分が吹き抜けとなっており、開けた空間となっている。2階には、貸出・返却カウンターやレファレンスデスク(図10)、利用時間が2時間までに制限され、蔵書検索、word、excel等が利用可能なPC30台(図10)、自動貸出機(図11)が設置され、図書のテーマ展示や新着展示等が行われていた。ここで特筆すべき点としてはレファレンサーに紀伊國屋書店や各メーカー等の大学と取引のある企業の人員を講師として招いて、学生の指導にあたっていることである。理系の大学だけあって学生の就職先は専門分野と関連する企業が多いとのこと、国立

高雄第一科技大學特有のサービス方法であることが伺える。その他、3階から5階はいずれのフロアも、資料が分野別に配架されている書架と閲覧席のスペースとなっている。



図 10 レファレンスデスクと PC コーナー



図 11 自動貸出機

## ②アクティブ・ラーニング

デザイン性のあるインテリア家具類は学生がくつろげる空間を演出するものであり、第 e 書房内での飲食は原則禁止であるが、どこことなく居心地の良いファミリーレストランやカフェテリアのような雰囲気である (図 12)。一方で、一定の空間に様々な機能を盛り込んでいるので、少々雑多に感じるところもあった。見学日は学園祭当日であったため、利用者があまりおらず、実際の様子がわからないところが残念ではあるが、学内には図書館の他に学習できるスペースは特に設置されていないとのこと。ただ、図書館全体としては利用者教育に力を入れていることが伺えるが、第 e 書房という場を利用したレファレンスデスクやライティングサポート等の人的サービスについては、現在のところ行われていない様子であった。

## <利用者支援サービス>

### ①利用者教育

利用者教育として、クラス別や学科別等、申込制ではあるが、特定のグループを対象に、電子ブックの使い方や ScienceDirect、IEEE といった理系分野で有用に使えるデータベース等の講習会を実施している。2011 年は計 31 回実施され、2,318 人が受講した。過去 5 年間で受講者の人数は増加傾向にある。また、個人単位での申込制の講習会においては、参加を促すために、お昼休みに実施し昼食を用意したりと、様々な工夫を行っている。



図 12 居心地の良い空間デザイン

詳細については後述するが、最も驚かされたことは、講習会の参加回数や本の貸出冊数については、学校側で記録されており、就職活動において活用可能な e-ポートフォリオとして利用されているという。日本ではあまり馴染みの無い取り組みであるが、図書館側も利用者教育の内容について熱心に考えることができ、受ける側の学生も積極的に受講するきっかけとなるのかもしれない。

## ②学習・研究支援

学習支援としてはオンライン上での語学資料の提供が行われている。これらは出版社と1年毎に契約を行っており、図書館のホームページ上からのアクセスが可能、学外からもID認証で利用が可能となっている。その他の学習・研究支援としては、各学部・大学院に図書・雑誌資料の貸出を行っている。これらの利用状況を今後の選定の参考にもしている。

### <e-ポートフォリオの活用>

全学的に e-ポートフォリオを導入し、本の活用履歴、利用者講習会への参加履歴、レファレンスでの相談履歴等の情報も登録対象としている。図書館職員は利用者の e-ポートフォリオの閲覧と対応履歴等の情報の登録を行うことができ、利用者対応にあたって、e-ポートフォリオを参考にして、利用者個人に沿った対応が可能となっている。

### <職員採用・研修について>

国立大学のため、図書館職員は公務員であり、公務員試験（国家試験）合格者、かつ、図書館学科卒業者が採用対象の条件となっている。採用後、職員の研修会、図書館学会での研修コース、上級学校等への進学（定額補助あり）により、専門性を確保している。図書館職員の名前、担当部門、内線、メールアドレスは図書館ホームページに公開されており、ダイレクトに連絡をとることが可能である。

台湾では、科技大学は伝統大学とは異なり、台湾国内に 90 校程度あり、その中で 5～6 番目の評価を受けている。

韓国の延世大学のように、主題別専門司書を確保するために、卒業生から図書館職員として採用することはあるのか確認したところ、科技大学卒業生は多くが産業と繋がる企業に就職するか起業することが本来の姿であり、そのようなケースはないとのことであった。

### <電子化への質疑応答>

「電子化が推進される中、紙媒体資料も存在する現在、大学図書館としての方向性をどのように考えているか」と司書の方々に伺ったところ、「設立当初から電子化の構想があり、現時点において、図書館の電子化はほぼ完了している。この施設をどのように利用してもらうかが今後の課題」という回答をいただいた。

PC等の設備をそろえることなのか、データベースや電子ジャーナルを充実させることなのか、電子化という言葉は受け取る側によってそれぞれ尺度を変える。携帯電話、PC、タブレット等、加速度的に情報機器の技術が発達する昨今、電子化には終わりが無いのかもしれない。

今回見学した施設は、時代に即応しようとした一つの結論であり、その対応スピードは日本の感覚よりも早いと感じた。一方で、機器を揃えた後に、効果的に利用者へ普及していく方法は模索中であるという。国は違えど、施設の利用促進の面では台湾も日本も共通の課題を持っている。台湾の大学図書館を身近に感じた瞬間だった。

注

#### 1) ポートフォリオ評価

ポートフォリオ評価（Portfolio Assessment）とは、「学習者が自発的に学習した結果やその成果を後々利用できるように整理し、評価（自己評価、他者評価）を加え、蓄積

したもの。学習してきたことに対する各人の意味づけを表現するための生産的な手段」と定義され、第一に自己の成長を査定し省察する機能（自己志向）、第二に学習プログラムの中でいかに進歩したかを査定することを促す機能（自己志向）、第三に外的リソースに対しての自己表現を促す機能（他者志向）を果たすとされる。

e-ポートフォリオ（e-Portfolio）は、電子的にサーバ上等に学習成果等を記録・蓄積して活用するもので、ICT活用により大学等での導入も見られるようになった。

#### 参考文献

- 1) 国立高雄第一科技大學圖書資訊館, (2013), 『国立高雄第一科技大學圖書資訊館 HP』.  
(<http://www.lic.nkfust.edu.tw/bin/home.php>, 2013.2.6.)
- 2) 国立高雄第一科技大學圖書資訊館, (2012), 『第 e 書房: First Tech Learning Commons (パンフレット)』.
- 3) 国立高雄第一科技大學圖書資訊館, (2012), 『圖書資訊館: Library and Information Center (パンフレット)』.

### 3. まとめ

#### 3.1. 最後に

今回の集合研修では、電子化(=情報化)の推進が主たるテーマであった。各訪問機関は、国策である教育情報化政策の下で各々の役割を担い、学術情報の円滑な流通と提供を先進的に進めていた。KERISは、主に教育・研究に携わる人々を対象に学術情報の流通・提供のインフラとなる諸政策を進め、国立デジタル図書館は、広く国民を対象にデジタル資料の普及・活用支援に努め、各大学図書館は、所属構成員を中心に図書館システム及び電子リソースの提供、システム間の相互連携、情報環境等設備、認証基盤とこれらの図書館等内の諸システムの連携等の情報化を推進していた。しかし、この情報化推進の下であっても、各大学図書館の取り組みは一律ではなく、様々な学習・研究支援サービスが展開されていた。

具体的には、韓国・台湾の大学図書館ではいずれも電子化(=情報化)が一般的になり、電子化した後の資料をどのように活用してもらうか、利用者教育に力を入れている一方、使い方については学生に一任し、その後の専門的なサービスについて主題別専門司書を配置して対応されていたのが印象的であった。さらに、韓国においてはいずれの大学図書館でも個人座席予約システムが導入されており、日本との学習スタイルの違いや学生自身の学習・研究に対する意識の高さも感じ取ることができた。

韓国におけるマルチメディア利用者のための施設・設備は、その名の通り、国立デジタル図書館や私立延世大学図書館において特に整備が行き届いていた。アクティブ・ラーニングを行うことのできる施設・設備については、韓国の大学図書館ではグループ閲覧室に留まっているのが現状であったが、国立ソウル大学ではカフェ併設のインフォメーション・コモنزの要素を含めた新館を今後設置予定であるという。台湾では国立高雄第一科技大學で2012年に開設したラーニング・コモنزを見学させていただいた。

一方、昨年度の海外集合研修先の一つ、University of Massachusetts Amherstではラーニング・コモنزへの取り組みが充実している中、加えて2013年にマルチメディア制作に関わる施設・設備 Multimedia Production Centerを設置予定だという。韓国ではインフォメーション・コモنز、台湾ではラーニング・コモنز、アメリカではマルチメディア・コモنزと、相互に参考にする点があるようだ。

今回訪問した韓国の大学は、韓国トップの大学であり、学生への学習参加に向けての様々な仕掛け、つまり、アクティブ・ラーニングとして他部署との連携をラーニング・コモنزとして実施するニーズより、ワールドクラスの大学となるために、優秀な留学生を獲得し、いかに学習・研究成果をあげられるユビキタスな環境を造り出すかが重要視されていた。

これらのことからどちらが優れている、といったものではなく、各大学において学習・研究環境の把握、それらについての情報収集が必要で、その後各大学の特色に適したサービスを実施していくことが大切なのではないかと感じた。

このような多様な展開は、教育情報化政策やグローバル化が進展する中で、教育の理念や建学の精神に沿ったより一層の学習・研究支援サービスの充実のために、どのように学術情報サービスを俯瞰し、個々の実現すべきサービスを行うべきかについて、各大学図書館が熟慮し導き出した帰結であった。

## 参考文献

- 1) Sarah C. Hutton, 2012, 『Supporting the 21st Century Learner: Building the Multimedia Production Center at the University of Massachusetts Amherst』  
([http://www.jaspul.org/collegium/asset/docs/sympo2012/01\\_English.pdf](http://www.jaspul.org/collegium/asset/docs/sympo2012/01_English.pdf),  
2013.2.21.)

### 3.2. 謝辞

「東アジアにおける電子化推進図書館を見る」という研修テーマで、日常の図書館業務から離れて電子化先進国である韓国・台湾を訪問し、その背景や考え方等を、現地職員と意見交換することができたことは、貴重かつ意義のある経験となった。

改めて、今回の海外集合研修の実現に向けて携わっていただいた全ての皆様（訪問機関のご担当者、現地の通訳の方、私立大学図書館協会、国際図書館協力委員会事務局関係者、及び、研修委託先の株式会社アメリカンドリーム関係者）に感謝申し上げたい。

そして、参加者の立場から、海外集合研修は、私立大学図書館職員の国際性を育成する有意義な取り組みの一つとして、今後とも継続的に実施されるべき重要な制度であることを述べて終わりとしたい。

以上